

---

# 魔法少女は俺がやるっ！

秋兎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女は俺がやるっ！

### 【Nコード】

N8741L

### 【作者名】

秋兎

### 【あらすじ】

つまらない日常にうんざりしていた不良少年の主人公は、ある日異世界へ飛ばされる。そこには一人のポニーテール魔法少女が立っていた。「あなたは、魔法少女になったの」そう告げられた彼がおそるおそる自分の姿を見ると、なんと女体化してしまったているではないか！必死に元の世界へ帰してくれと頼む彼に少女はある条件を出した。魔法と召還獣を使いこなす、最強系主人公＆最強系ヒロインの無敵タッグな異世界召還ものです。 四石以降フルカラーの挿絵が全話に入ってます 9/14更新！ 『第十二石：

ナミダ、乾かして』 今回の挿絵 『不思議がるゆりなちゃん』  
コメディ8割シリーズ2割

## ブローグ

日常、それはとても退屈なものだった。

だが、それはとても幸福なものだった。

いつものような毎日が永遠に続くものだと思っていた。

+  
+  
+

「……」

空に昇る巨大な赤い月を呆然と見上げる。

雲もないのにフワフワと舞い降りる赤い雪を払いのけ、

俺はひんやりとしたベンチから起き上がった。

「あー。悪いが、そのチビ助。もう一度言ってくれないか」

はいた白い息は、すぐさま赤い世界に埋もれてしまう。

目の前に佇む少女は、俺のため息に自分の吐息を重ねながら、こ  
によごによと呟いた。

「だ、だからね、」

決心したように彼女は笑顔で続ける。

「あなたは、魔法少女になったの」

……。

我ながらバカな夢をみるものだ。

俺にそんな願望があつたなんてね。

はは、恐ろしい。

「笑えん冗談だな」

ひらひらと手を振り再びベンチに横たわると、強引に目を閉じてやる。

これは悪い夢だ。そうに違いない。

現実世界に戻ろうとまどろむ俺の頬に冷たいモノが触れる。

「キミは、あつたかいんだね……」

+ + +

幸せの壊れる瞬間なんて、あつけないものだった。

シアワセ　。

それは、ガラスのように透明で解りづらいモノ。

そして、ガラスのように簡単に割れやすいモノ。

割れた破片はそれを越えようとする人をいとも簡単に傷つける。

体だけでなく心さえも、それは無残なまでに。

その破片に足を取られ、転んでしまわないように。

何故なら起き上がるには耐え難い苦痛を伴うから。

ああ……。

知らなかったんだ。こんなにも幸せが脆いものだったなんて。

どうして、と笑う彼女を背に、俺は泣いていた。

この美しくも醜い世界をただただ呪うしかなかった。

「もう行かなくちゃ」

少女は言った。

「ごめんね」

そう、悲しみを添えて。

## 第一石：シャクヤク異世界に立つ！！

「……へつくし！」

寒い。寝返りをうちながら、俺は鼻をグシグシとこする。

今何時だ？

……いや。まあ、いいか。今日もいつものように遅刻して行こう。  
むしろ、休んじまうか。面倒だし。

今更、不良の俺なんかが定時きっかりに学校へ行っただけで熱でもあるのかと疑われるだけだろうし。

あー。考えるだけで鬱陶しい。やめだやめ。

とりあえず今はモーレッツに眠い　包み込むような眠気に俺はそのまま身を委ねることにする。

目を閉じ、再び眠りの中へとダイブを……。

「おい、そのシラガムスメ」

ダイブを……。

「おいってば。おめえはいつまでグースカと他人様の布団で寝てんだよ！　その自慢の白髪、真っ赤に染めかますぞコノヤロー！」

朝っぱらからうるさいな。どこのヤンキー女だ。

「つーか、ムスメなんざ俺の家に居ないっつーの。親父と俺しかない、町内一のむさくるしい家族をなめないで頂きたい。」

「恐縮だが、隣の家と勘違いしちゃあごさいませんかエ。あいにく、ここは男だらけの大父子家庭でね。白髪なのは認めるけれども」

布団をかぶり、そう返す。やがて静寂が部屋を満たした。

案外とまあ、あっさり引き下がったもんだ。

少し残念な気もするけれども。今はとにかく 眠い。

「さてはてと」

言いながら、ぬくぬくと猫のように体を丸める。

うつらうつらとしかけた時

どすん。

なにかが俺の胸の上に……ぐお！

「寝ぼけてんじゃねえよ。そのツラのどこが男だってーんだ！」

何を。こいつは、さっきから何を言っているんだ。寝ぼけてんのはお前のほうだろうが。

ああ、頭に来た。

俺は布団から飛び起きると、フワフワと浮かぶそいつをガシッと



掴んで、

「せっかくの俺の二度寝タイムを邪魔しやがって！ この、クソ猫が　　って、猫だあ！？」

即座に慌てて放してしまった。

おいおい、こりゃあなんのジョークだ。

なんせ俺の前に浮かぶは、ちびっこい黒猫。こいつが喋ったのだというから頭が痛い。やべえ、マジで寝ぼけてんのかも俺。

じゃなかったら、なにかの手品か？　そう手で猫の背中辺りを触ってみるが、

「言つとくが、糸なんかで吊るされてねーからな……　って、これポニ子んときにも言っただ気がするぜ」

小さな肉球をやれやれと言わんばかりに己の頭にポフツとあて、眉間にシワを寄せる。

この仕草。この表情。

こいつは、ホンモノだ……。ファービーのパチモンじゃないことだけは確かだ。

「なるほど。この猫、マスコミに売ったら俺は一攫千金……　一生左団扇で暮らせるといわけか。益体も無い女が天から降ってくるよりも有難いな」

「ぬわぁにが、なるほど。だてめえ！　つーか、可愛い顔して物騒なこと言ってんじゃねえ、このバカシラガ！」

ほほう。口は悪いが、それもまた愛嬌。キャラ的には申し分ない。これは良い見世物になるな。上手くいけば遊園地のマスコットキャラクター的な立ち位置もありうるかもしれん。

とにもかくにも悪は急げだ。俺はそいつを再び掴むと、勢い良くベッドから飛び降り　　っ

「うによえっ！？」

奇妙な鳴き声を発するグニャとした何かを踏んづけ、

「おわっ！」

盛大に転んでしまった。

ジンジンと痛む頭を抑えながら、俺は立ち上がり、そしてギョッとした。

何故ならば、その踏んづけた物体とは

「……あううう、痛いよお！　おなか破れるぅー！」

どこにでもいそうな女のガキンちよだった。

腹を抱え、ごろごろと辛そうにのた打ち回っている。

なかなかファンキーな動きをするものだ。今時の若者にしては筋がいい。

ふむ、と。俺はそいつを観察してみたりしてみる。

腰まである長い黒髪に、歳は俺より若いだろう。いや、それかなりだ。見たところ小学生くらいに思える。

俺が十四だから　四、五つ下くらいか。ガラガラ蛇と蜘蛛が威嚇しあっている柄というハイセンスなパジャマを着たそいつは、涙目で俺を見上げると、

「あうー！　のんびり解説してないで、もっと他になんか言つことあると思うよう」

「おお、すまんチビ助。あまりに見事な転げ回りっぷりに見惚れてしまつてな。リアクションの勉強になつたよ、いささかに」

いやはや、しかしまあ。なんだ。

「かなり遅れた気がするんだが、一体お前らは何者　もとい、何処の妖怪だ？　そしてこの少女少女した装飾をした部屋はなんなんだ。スイーツなお化け屋敷ブームが到来することを予見しての先取りなのか」

「よ、妖怪じゃないもん。あと、ここはお化け屋敷じゃなくってボクの部屋！」

そう女の子座りのままぷいっとそっぽを向くチビ娘。

「そうか。妖怪じゃないもんっていう妖怪か。座敷わらしにも色々な亜種がいるんだな。また勉強になつたよ、いささかにな」

「違うもん！ 人間だもん！」

「もんもんって、お前はモンザムライかよ。安土桃山時代からタイムスリップでやってきたのか。どうせなら平成なんつー下らん時代じゃなく、もっと未来にしたほうが良かったと思うぞ」

「あうう、ちゃんとしたお話が出来てないような気がするよ。ととにかく！ ボクの名前は久樹<sup>ひさがみ</sup>上ゆりな、だよ。それに、タイムスリップはボクじゃなくって、キミのほうだと思っ……」

「だろうねえ」

俺は未だ温もりを保つベッドの上に座ると、手の中で黙りこくつたままの黒猫をゆるりと解放した。

何を考えているのだろうか、そいつは飛び立とうとせず、俺の手のひらの上で少女の顔をジッと見つめている。

「だろうねって、キミもしかして気づいてたの？」

その少女 ゆりなは立ち上がると、目を丸くした。

「いやあ。正直、さっきまでは頭がぼんやりしてワケがわからなかったが、今になって意識がはっきりしてきたんだ。ありゃあ夢かと思ってたが、お前さんの顔覚えてるぜ。俺に魔法少女どうのって言うってた奴だろ？」

「そう、だっけ」

チビ娘はとぼけるように言う。

む。まさかマジで夢だったのか。あの時のトンチキな格好をした少女と瓜二つの顔をしている気がしたのだが。似ているだけか？

「いや、ポニ子。腹を決めようぜ。こいつが俺たちの目の前で召還されたのは多分、そういうことなんだろうよ」

「でもでも！ そんな、簡単に巻き込んでいいとは思わないよ。確かに少し魔力は感じるけど、でも『魔法使い』になるってことは……」

「大丈夫さ。このシラガ娘は絡みづらいが、肝は据わっている。魔法使いとしての素質も十二分にあるぜ、ポニ子ほどじゃあねえけどな。それに、戦力は一人でも多い方がいい」

「……無関係の人なんだよ。ダメだよ、そんなの」

「この世界に、魔力を持って召還された。これのどこが無関係なんだつつの。おめえの気持ちも解るけどよ」

なにやら、やつこさん達で勝手に話を進めてやがるし。当事者置いてけぼり過ぎるぞ。

ま、どうでもいいがな。魔法使いだかなんだか知らねえが、テキトーに相槌打って、俺はとっとと家に帰らせてもらうだけだ。

手土産にこの、世にも珍しい空飛ぶドル札をぶん捕まえてな。きつと喜ぶだろうな、親父のヤツ。

「もしかして、あのお婆ちゃんが召還したのかな……」

「だろうな。あのババアの仕業とみてほぼ間違いないと思うぜ。あまりにもタイミングが出来すぎてるからな。どっかの世界から魔法使いになりえそうなヤツを引っ張ってきてやるから、とつとパンドラの箱を封印してくれってことだろう。それくらい、切羽詰ってるんだろうさ」

「それならそうと、言えればいいのになあ」

「何か考えがあるのかもな。……まあ。あのババアはまともじゃねえから、なんとも」

「あ、ってことはだよ。いっぱいある世界の中から選ばれた一人ってことだよな。じゃあ、もしかしてもものすっごーい期待の新人さん？」

「キャパシティーに関しては、お前の方が優秀だとは思うが。まあ、まだ杖も持たせてねえんだ。どれくらい素質があるのかは正直、見当もつかねえな」

「そっかあ。そういえば、杖って言うてもボクのしかないよ？」

「ああ、それについてなんだが」

長い、長すぎる。

暇をもてあました俺は、とりあえずゆらゆら動く、黒猫の尻尾をちよいちよいと指で弾いて遊ぶことにした。

ていつ、ていつ。ててていつ。

「だあ、バカシラガっ！　人が真面目に話してるときに尻尾にジャレつくんじゃないねえ！」

すさまじいスピードの猫パンチが俺の左頬を強打した。つか、人じゃないだろお前！

「いつてて、よくもやりやがったな、クソ猫おお……」

このジャジャ猫め。俺が猫派だからといって下手に出ればこんちくしょう。

「けっ、さっきからクソ猫クソ猫って。オレの名は　クロエだ。霊獣クロエ。無い頭によく叩き込んでおくんだな」

「ほう。そうかい。化け猫さんにも名前があるとは結構なことだね。んで、クロエさんよお。その霊獣というのは一体なんだね。苗字にしてはいささかに訝しいものだが」

と、俺はからかい気味に言ってみる。

しかし。答えたのは少女のほうだった。

「色々、疑問があつて当然だよ。大丈夫、まとめてボクから説明するよ。ボクもイマイチわからないところ、あるけど……でも、その前にキミの名前を聞かせてもらえると嬉しいな」

澄んだ黒い瞳。無垢な視線が突き刺さる。ああ　こういうの苦手なんだよな、俺って。

テレビでたまにやるような動物特集なんてものが親父は好きらしく、よく居間で観ているんだが、俺はあいつらの人を見透かしたような瞳がキライでね。どうしようもなく胸がモヤモヤして、いつもすぐに席を立つんだ。

「どうしたの？」

ゆりなが俺の顔を覗き込む。

まただ。胸がチクつと痛み、俺はため息をついた。そんな目で、あまり見ないでくれとも言えねえし。

「……ああ、そうそう。名前、ね」

まあ、こいつらに本名を明かす必要もないだろう。どうせ長い付き合いんじゃないんだ。テキトーでいい。

俺はフツと視線を逸らすと、小さな学習机の上に置いてある一冊の本に目をとめた。

季節の花図鑑　　か。

そいつをパラつとめくりながら、俺は気だるくこう答えた。

「あー。俺の名前は、シャクヤク。よく、人に珍しいねって言われます。でも覚えやすいように近所のおばちゃんには大好評です。恐縮だけれど、ヨロシクどうぞして頂ければこれ幸いってなもんで」

しばしの間。



「あんだあ、その妙くりんな名前は！ オレの事言えねえだろ！  
つーか、お前。今、その図鑑からとっただろ！」

クロエが毛を逆立てて矢継ぎ早にツツコむ。

いやま、そりゃ当然の反応だ。

「ええと。それについてはだな、」

言いかけたところで、黒髪少女がずっと割り込んで、

「ダメだよ、クーちゃん！ ボクは、とっても可愛い名前だと思う  
もん。シャクヤクちゃん……、ううん。しゃっちゃんって呼んでい  
いかなっ？」

と。

んな名前あるわきゃないのに。フツー信じるかねえ。それに言い  
づらくないか、そのしゃっちゃんってのは。妥協してさっちゃん  
でもいいんだぜ。某大手の幽霊様とかぶっちゃんいるが、さ。

いやはや、まったくもって。なんだろうねえ、この子は。

俺にはどうもこの子がわからない。今までの人生で会ったことな  
いのだ、こんな娘に。

いや、こんな人にか。

だから、この時の俺はどう答えればいいかわからず、アホ面満開  
にただ頷くしかなかった。

「わーい、やったあ！　じゃあ、自己紹介も済んだことだし。かい  
つまんで説明するね。ボクたちのこと、魔法のこと、この世界のこ  
と。そして　キミのことを」

言っと、ゆりなは俺の隣にそっと座り。そして、ゆっくりと。た  
だどしく、話を始めた。

## 第一石：シャクヤク異世界に立つ！！（後書き）

投稿スピード重視のコメディものです。楽しんで頂けたら幸いです。  
気を抜いてるようでちょっぴり本気だったりもします。

物語を楽しむヒントその1。『花言葉』

## 第二石：鏡の中に映る少女

「ある日ね、ボクの家小さな箱が送られてきたの。キラキラたくさん宝石に彩られた、とても可愛い小箱。ええっと、確かこの辺に」

言っと、ベッドの下からもぞもぞと小箱を取り出した。ほお。ごてごてとまあ、立派なものだな。

「でしょ。それでね、一体何が入ってるんだろって開けてみたら、凄い数の宝石がつまっていたの。赤いのか、青いのか。とっても綺麗な宝石たちがいっぱい。綺麗だなーってしばらく見惚れてたんだけど、急に爆発したの。どっかーんって」

はて。爆発した割には焦げ痕が見当たらないが。

というか、よく五体満足でいられたな。

そんな至近距離で爆発があったというのならば、普通無事では済まないと思うのだが。

「ち、違うよ。そういう爆発じゃなくって、なんていうのかなー。七色の光が、ぶあーって！ それでそれで、中に入ってた宝石が、ばびゅーんって、……えっと、あのあの」

ぶあー、に。ばびゅーん、ですか。

まるで子どもみたいな説明だな　って、子どもだったな。そういや。

しょうがねえかと溜め息をついた俺に、ゆりなが慌てて両手を振る。

「ふえ〜っ。しゃっちゃん、ごめんね！ あうっ、クーちゃん助けてええ」

説明係りに任命されたクロエは嫌な顔をするかと思いきや、待つてましたとばかりにゆりなの頭上へと着地すると、

「へっ。だろうと思ってたぜ。しょうがねえな、ここからはオレが説明してやる。よく耳の穴かつぼじって聞くんだな。ええっと、なんだ。そうそうこの箱だ。こいつは、『パンドラの箱』ってんだ」

パンドラだあ？　こんなちっこい箱がそんな壮大な箱には見えねえぞ。いささかに、怪しいものだな。

「怪しめ怪しめ。オレだって正直な話、これがあの伝説のパンドラかどうかは半信半疑さ」

けけっとなんて笑いながら、

「だが、このパンドラ　もしくは、パンドラモドキにはあらゆる災害、すなわち『厄災』が詰め込まれていた。これはマジだ。そう、伝説の箱そのままにな」

災害か。地震、雷、火災、みたいなアレかい。

「ああ、そんなところだな。んで、それらの厄災は『七匹の霊獣』と呼ばれる護り神に一つずつ封印され、箱に詰められていたんだ。

ここ数百年は何事もなくピースの元で保管されていたんだが、何がどう回りまわってか、こいつ　ポニ子ところに突然パンドラが送られちゃったワケ。そして、」

しばらく聞き入っていたゆりながそれに続けて、

「そしてね。ボクがそれを開けちゃって、霊獣さん達みんな散り散りに飛んで行っちゃったんだ……」

なるほどな。爆発というのは、そいつらが逃げ出した瞬間のことを言ったのか。

「……うん」

こくんと、すまなそうに俯く。足場を失った黒猫は慣れた動きでゆりなの肩へと移動すると、

「だから、おめえは悪くないっつーの。ピースのやろうがちゃんと見張ってねえから悪いんだ」

ええとだな。とりあえず『ピース』とやらが何なのか見えてこないのだが。

「ああ、ピースつつつのは詳しく説明すれば長くなるが、端的に言えば魔女だ。この世界で現存する唯一にして最強の魔女。これは、ババア本人が言っていたから本当かどうか定かじゃねえケド」

「ボクは本当だと思う。だって、そのお婆ちゃんからあんなすごい魔法の力をもらったんだから。絶対、凄い魔女さんに違いないよっ」

自信おありなよう。会ったのかい、そのピースという婆さんに。

「ううん。声だけ、かな」

「滅多に人前に姿を現さないからな、あの婆さんは。出てきたとしても、いつも不気味な面をかぶっていやがるし。そーいや、オレでさえ素顔は見たことねえかも。まあ、それは置いてだ。そのピースから魔力と杖を授かったポニ子は、飛んで行ってしまった宝石を集めなきゃいけねえことになったワケ」

ははあ。

なにやら凄い魔女だというのは分かったが、そんなに凄い凄いと  
言うのなら、そのピースとやらが直々に宝石を探しに行ったほうが速いんじゃないのか。

わざわざ、ペーペーの子どもに魔法伝授なんていうまどろっこしいやり方じゃなくてよ。

もたもたしてちゃあやバイんだろ、厄災つつうくらいだし。

「真つ当な意見だな。オレもそう思うぜ。まあ、答えは単純な話だ。あのババアは　ピースはまともなヤツじゃない。何を考えているのか分からない変人さ。あいつは自分ではさらさら動く気がないらしい。だが、ポニ子ひとりじゃあ全ての宝石を探し出すには、さすがに時間がかかりすぎるってことで、」

なるほどねえ。中々に読めてきたぞ。俺がア、アレかい。そういうことかい。

「じ明察」

黒猫がニヤリと笑う。

「そう、おめえに白羽の矢が立ったというわけだ。ポニ子とシラガ娘の二人でならスムーズに宝石を集められるだろう、ってな」

あー、予想以上に面倒な話だ。そんなじゃま、ここいらが引き際かね。

「へえへえ。そりゃあ光栄痛み入る話で。だがね。恐縮だけれども、辞退させてもらうよ。俺ア、ロボットやSF世界なんてものは好きだけれどよお、魔法なんてものには一切ピンともカンとも興味が沸かなくてね。もう一度ピースという婆さんへ選抜し直してもらうことをオススメするさね。やりたいヤツは沢山いるだろうし。悪いけれどもってことで、そろそろお暇を」

俺の言葉に、ゆりなが顔を上げた。

「うん。しょうがないよね。……無関係なしゃっちゃんを巻き込むわけにはいかないし。大丈夫だよ、ボクひとりで出来るもん」

うお。またあの瞳だ。やめてくれっての、それ苦手だから。あと、しゃっちゃんはやっぱり言いにくいだろ。

「……ひつぐ、うう」

って、おいおいマジか。



ぼたぼたとゆりなの瞳から大粒の涙がこぼれ始めたところで、耐えきれなくなつた俺は立ち上がって、

「まア。そう悲観しなさんな。すぐに代わりはやってくるさ。次はきつと、俺より男前なペンペン草クン辺りが来るだろうさ。そしてら、ペンペンちゃんとかペン草ちゃんとか噛まないような名前で気軽に呼べるぞ。喜べ。そして笑え。出来たら泣き止め」

と。俺にしちゃあ頑張つたほうなんだが。

しかしながら。

「……ひつぐ、しゃっちゃんのほうが可愛いもん。ひつぐ、噛まないもん。ひゃっちゃん、うえええん」

いやいや、さっそく噛んでるし。

「あーあ。ポニ子を泣かしてやんの、バカシラガ。しーらね、しらね。ピースに言ってる。けけっ」

クロエが茶化しながらふよふよと面白そうに俺の目の前を飛び回りやがる。

「クソ猫オ。ふざけてねえで、どーにかしてくれよ。男が子どもを、しかも女を泣かしたとくりゃあ、親父に申し訳がたたねえって」

言い切つた俺だったが。

ん　？　なんだ、この空気は。

さきほどまでケラケラと楽しそうに浮遊していたクロエが突然ストップし、

「…………男があ？」

訝しそうな目で嘗め回すように俺の顔を見る。

ついでに、わーわー泣いていたゆりなも、きょとん顔で俺をジッと見上げている。

「…………子どもを？」

「な、なんだよ。俺のツラに何か変なものでも、」

言いかけたところで、そいつらは顔を見合わせてドツと笑い出した。

「にやははははっ！ 男が、子どもを、だってよ！ こいつは笑えるぜっ」

「だ、ダメだよクーちゃん。しゃっちゃんは本気で気付いてないんだよ…………ぶっ、あははは！」

ちょっと、タンマ。マジで何を笑ってんのか理解出来ないのだが。

いやいやいや。そんな、お二人さん。

笑い転げてる場所すまないけどもさ、なにがそんなにツボに入ってたんで。

さつきまでの涙を笑い涙に変えたゆりなが、うろたえる俺に、

「じゃ、しゃっちゃんの後ろに鏡あるから、それ見てみるといいよ」

鏡イ？

身体をねじると、確かにそこに鏡があった。

「鏡はあるけどもよお。それが、どうしたって」

時が止まった。

こんなありきたりな表現が精一杯だった。

全細胞がそれまでの作業を中断し、口々に「どういつことだよ…  
…」と騒ぎ立てているかのような。

それほどまでに、鏡の中は狂っていた。

「どうだい、生まれ変わったてめえの姿は。可愛いじゃあねえか、  
いささかに。ってかぁ？ にやはははっ」

黒猫のからかいにツッコむ気すら起きん……。

「おかしいなーって思ってたけど、本当に気付いてなかったんだね。  
しゃっちゃんってば」

ああ、そうさ。今の今まで気付かなかった。笑われて当然だった  
な。

なんて バカバカしい。

なんて 滑稽な。

長いまつげ。震える桃色の唇。ふんわりと緩いカーブに整えられた銀髪。

版權もののネズミがプリントされたガキくさい白のキャミソールに、やたらに丈の短い水色のスカート。

> i 1 2 5 2 3 — 1 7 6 1 <

「なんじゃこりゃ」

鏡の中のチビ女が俺の挙動を逐一真似やがる。

シャドーボクシングをすれば、鏡の中のそいつが微笑ましいパンチを繰り出すし、

メンチを切る仕草をすれば、鏡の中のそいつは悩ましげな表情をするし

「つて、なんじゃこりゃああー!!」

両手を振り上げて膝から崩れ落ちつつ、もう一度だけ念のために叫んでみる。

が。

やはりというべきか、掃除の時間にテンションがあがってふざけちゃいましたと言わんばかりのガキンちょが鏡の中にいた。

ふむ。

少し乱れてしまったスカートと前髪をちょいちょいと直しながら、こほんと咳きを一ツ。

「おい、コラアアア！ ニヤン畜生オオオ。命が惜しけりや、悪いことは言わねえ。俺様を元の姿に戻せ、いますぐにだ」

隣でニヤニヤと笑う黒猫の尻尾をシャカシャカと振りながらずこんでみるが、

「そいつは無理だな。オレに言われても、こればかりはおめえを呼んだピースじゃねえとさあ」

「だったらピースを呼べ！ 俺は男に戻って元の世界に帰るっ。こんなふざけた話があるかよ！」

言つと、クロエはスツと真顔になって飛び上がり、

「元の姿に戻り、そして元の世界に帰りたいのなら、いくら探したって方法は一つしかないぜ。お前が第二の魔法少女となり、ポニ子と……ゆりなと一緒に散らばった宝石を全て集めることだ。どうあがいても、これしかテメエに道はねえよ」

俺を見下ろしながら、冷ややかな口調でそう告げた。

### 第三石：まな板の上の猫

こいつは……。

なんて、簡単に言いやがる。

だいたい何故、男の俺がガキ娘の姿に変えられてまで宝石とやらを探さなきゃならんのだ。

ハナっから女を選んで、そいつにやらせりゃあいいのに。

魔法少女なんてもんは、女の仕事だろ。

「さっきも言ったが、ピースの考えはオレだって良くわからねえぜ。これは多分だが、察するに大物になりうるであろう素質さえ備わってりゃ、性別はどっちでもいいのかもしれないな。

どうであれ、性別を変えるくらい、あのババアだったら朝飯前だろっし」

「だから、どっちでもいいーなら、なんでワザワザ女に変える必要があるんだ。

男のまんまでいいだろ。魔法少年ってことでさア」

「あー。言われてみりゃ、そうだな。うーん。ほら、アレだろ。ピースの趣味。

魔法使いは、やっぱり少女じゃないとダメっていうさ」

イヤな趣味のババアだな……。

「自分が歳を食ってるっていうんで、若い女を従えてピチピチエネルギーを吸収しようとしている、とかな。にっしっし！」

ピチピチエネルギーで。

「魔法世界の上下関係なんざ、まったくもって知らないけどもよオ。そいつは偉い魔女なんだろう？」

よくそんな口の悪さでやっていけるな。俺がピースだったら、と  
りあえずお前さんをクビにするぞ」

言いつつ、ゆりなの横へどっかりとあぐらをかいた俺に、

「それは出来ないと思うよ。だって、クーちゃんは特別だもん」

すっかり笑顔を取り戻したゆりなが、自慢げに無い胸を仰け反らせながら言う。

「しゃ、しゃっちゃん！」

> i 1 5 2 1 6 — 1 7 6 1 <

……ん？

「むーっ！ ボクだって一応女の子なんだからねっ」

ふうん。

イチヨ前に顔赤らめて、まア。

「わりい、うそっぞ。言葉の綾だって。日本語むつかしいアル」

「うー。訂正を要求します！」

謝罪までいなくて良かったよ。

「オーケイ」

んじゃ、えーと。

すっかり笑顔を取り戻したゆりなが、自慢げにナイスバディを仰け反らせながら



「そ、そーゆー意味じゃないよっ！」

泣いたり笑ったり怒ったりと。

なんとも忙しい奴だな。

「あっ」

ゆりなが驚いた声を出し、俺の顔を覗き込む。

「な、なんだあ？」

「今、しゃっちゃん笑ったでしょ。とっても可愛かったよ」

にへへーと屈託のない笑みを向ける少女。

……ったく。

俺ばかりが面食らって、どうもね。割に合わん。

そっだな、ここはひとつ。

「なんだ知らなかったのか、俺はどんな表情でも可愛いんだぜ」

耳にかかる髪をかきあげながら言ってやる。

ちなみにこの仕草は俺が一番グツとくるヤツだ。

「うんっ!」

って、おい。

「そこは否定してくれって、冗談に決まってるだろうよ。恥ずかしい」

「えへへ。恥ずかしがってるしゃっちゃんも可愛いよ」

「……そりゃどーも」

そういえば。

さっき、こいつに顔を覗き込まれても胸が痛まなかったな。

どうでもいい話ではあるけども。

「仲良きことは美しきかな。微笑ましいところ悪いが。おめえら、ちよつち窓の外を見てみそ」

唐突に、クロエがシリアスな声色で言う。

「へ？」

二人で外を見やる　と。

朝焼けの中に一匹の蝶々が舞っていた。何故かその羽根は淡緑色に発光している。

「ほよー。光ってるキレイな蝶々さんだ。あはは。やっぱし気になるんだ？」

なんだかんだ言つて、クーちゃんって猫さんだよね。

今日のにゃんこつてテレビに出てた子も蝶々さんと遊ぶの好きだったし」

クロエはやれやれとばかりにため息をついて、

「バーロオ。おめえさア、羽が光ってるテフテフなんざ現実にいるわきゃねーだろ」

「えっ!？」

俺たちは同時に驚いた。

浮遊する猫が存在しているくらいなんだから、光ってる蝶だって  
いそつなもんだけだな。

「シラガ娘は勘違いしてるみたいだが、オレたちが特別なだけであ  
って、世界自体は至極真つ当なんだ。

みんな、魔法なんて現実にあるとも知らずに暮らしている。

それこそマンガやアニメの世界のものだって認識さ」

ということは、俺が元に居た世界とあまり変わらないのか？

「どうか。まず、おめえがどういった世界に居たかを知らねえし。  
まあ、自分の目で確かめてみることだな、早速よ」

早速      ？

「オレの話きいてたろ。パンドラから逃げ出した七匹の靈獣を魔法  
でぶちのめして捕獲し、宝石へと再度封印をするってよ」

逃げ出した霊獣と宝石集めどつのはきいた気がするけども、具体的な流れは今初めて知ったぞ。

「じゃあ、今言った。ほら、ボケボケしてねえであの蝶々を捕まえに行くぜ、ポニ子！」

「ええー！　せめて着替える時間が欲しいよお。出来れば髪を結う時間も……」

「んなノンキに構えてる余裕あるわきゃねえだろ！」

「は、はう」

どてらだけでもと、羽織ってバタバタ部屋を出て行くゆりなと黒猫を見送り、俺は肩をすくめた。

いやはや大変だねえ、魔法少女とやらは。

こんな朝早くから出勤だなんてさ。恐れ入るね。

「さてはてと」

ベッドの中へ入り、ぬくぬくと猫のように体を丸める。

うつらうつらとしかけた時

どすん。

なにかが俺の胸の上に……って、ぐお！

「このやり取りさつきもやっただろ。いーから、おめえも来るんだよ、バカシラガ！」

二度も踏んでくれやがって。小さい胸が更にへっこんじまうだろ  
うが。

「……小さいもなにも、まな板同然じゃねーか」

「むーっ！ 私だって一応女の子なんだからねっ」

頬を膨らませて、言ってみたり。

「わあった。漫才ならあとでいくらでも付き合ってやるから、マジでもう行くぜ」

呆れ口調で返される。

「へえへえ、切羽詰まっているようで」

「放っておいたら、誰かに見つかって大騒ぎになるかしんねーしな。」

それならまだしも、暴れて町を壊されたりなんかしたらもつと厄介だ」

厄災を抱える獣、か。

久々のシャバだ。遊びたくなるのも解る。

やむかたなし。

行くしかないってワケねえ、どうしても。

#### 第四石：コロナ、シャクヤクと 前編

外に出るとゆりなが今にも泣き出しそうな顔で、

「ど、どうしよう、見失っちゃったよお」

せわしく足踏みをしながら言う。

その足踏みに意味はあるのかと問いたくなるが、その前に黒猫のツツコミが入った。

「あんだと、先に追いかけてろって言ったじゃねーか！」

「だってえ、一人じゃ心細いんだもん……」

にへへと照れながら、兩人差し指の先端を合わせてモジモジ。

なんともまあ。

現実にそんな仕草をするヤツ本当にいるんだな。

「かぁー、なっさけねえ」



やれやれと大げさに嘆くクロエ。

「いやはや、それでも天下のグレート魔法少女かい？」

続いて俺もからかい気味に言ってる。

「はう。ボクは天下でもグレートでもないよ……」。

この前なつたばっかだし、魔法だってまだ一個しか知らないもん」

そう、うな垂れるゆりなに俺は肩をすくめた。

うーむ。マジメに返されてしまうと、なんとも。

「つつーか、ポニ子を責めてんじゃねえ、おめえがチンタラして  
いたからだろ！」

突如、繰り出された猫パンチがみぞおちにクリーンヒットする。

へそ丸出しルックの今の俺にそれは大ダメージなワケで。

誰だよ、キャミソールなんて防御力皆無なもんを俺様に着させた  
奴はア。

「イテテ、こんのバカ猫お……自分だつてガーガー言つてたクセに」  
「いいんだよ、オレは。ポニ子をイジめていいのはオレだけだ、おめえにはまだ早い。いささかにな」

ふんぞり返つて言う黒猫に、俺とゆりなは顔を見合わせた。

なんだその、好きな幼馴染の女の子にちょっかいを出したヤツに怒り心頭のガキ大将が胸ぐらを掴みながら言いそうなセリフは。

「……よくそんな例え、瞬時に思いつくよな」

それは贅辞として、受け止めておくことにしよう。

「あ、あのう……。クーちゃん、蝶々さん追っかけていいの？」

と、ゆりなの発言にクロエはハッと思い出したかのように、

「おっと、そうだった。それじゃあここは二手に分かれて探そう。  
オレとポニ子は左へ行く、シラガ娘は右を頼むぜ」

「ほい、了解うけたまわりっ！　しゃっちゃん、見つけたら知らせてねっ」

そう言って、そそくさと二人で立ち去ってしまった。

ポツーンと佇む俺の目はきつと点のようになっていたことだろう。

おいおい、ちょっと待ってくれ。一つ疑問なんだけどもよオ。

見つけたら知らせろってさア、どういった手段で知らせりゃいいんだよ？

心の中で嘆いた後、俺は一人寂しく右の道へと歩を進めることにした。

+ + +

口笛を吹きながら頭の後ろで手を組み、適当に歩き回ってはみるが。

「いねえじゃんよ……」

周りを見渡せど、それらしい蝶なんざ一匹たりとも見当たらない。

トンボや天道虫なら山ほど見かけたけどさ。

「やってらんねえ」

俺は公園のベンチに腰を下ろして、空を見上げた。

ゆっくりと流れる厚い雲、暖かい陽光。鳥のさえずりが眠気を誘う。

「なーにやってんだろ、俺ア」

知らん世界に飛ばされて、いきなり知らん道を歩かされて。

魔法少女になれたの、霊獣とやらを捕まえるだの……よ。

これがロボットに乗って世界を救えとかいう、熱い展開ならまだ気は乗らないでもねエが。

ん？

そもそも、何故俺はあいつの言うことをマジメにきいているんだ。

黒猫の言葉を思い出してみる。

たしかあいつは、

俺が第二の魔法少女となり、あのチビ助と一緒に全ての宝石を集

めない限り、

元の姿および元の世界に戻れないと言ったな。

もしも、それ以外に方法があるとするのならば。

例えば、雇みたいなモノがあつて、そこへ入ると現代に戻るみたいなさ。

そんなもんなくとも、何か情報が掴めるかもしれない。今はちよつと自由に行動出来るし。

あいつらと仲良しごっこをして宝石を集めるなんざ、長ったらしくてやってられんし、それ以上に性に合わん。

「どうせだったら……脱出方法を探ってみるか？」

そう一人呟いたつもりだった。

しかし、その時。

「肯定です。探ってみましょうです」

小さな返事が返ってきた。

ゆるりと視線を下げると、目の前に少女が立っていた。

俺だって今は少女の分類に入るかもしれないが、その声の主は更に幼かった。

いいところ五、六才あたりか？

> i 1 9 1 9 5 — 1 7 6 1 <

今にも眠ってしまいそうなトロンとしたエメラルドグリーンの瞳に、

ペリドットカラーのさらさらツーサイドアップ。

やけに袖の長い園児服のようなものを身にまとった彼女は、一旦視線を彷徨わせたあと、

「肯定なんです」

もう一度、俺をジッと見つめて言った。

こりゃあ。どう見ても俺に向かったの発言だよなア。

次から次へと　今日は間違いなく厄日決定だ。

#### 第四石：コロナ、シャクヤクと 後編

さてはて。

「あー、外回りで疲れてるんだ。日本のお父さんは忙しくてなあ。今日なんてまだ一台も契約が取れなくてさ。来週までに三台は取って来いなんてムチャ言うんだぜ、まったくもって、現場が見えてねえんだよなデスクワーカー共って奴ア。」

とまあ、詰まるところのあっちへ行って一人で遊んでくれると助かるのだよつつう事だ。しっし」

手を振るジェスチャーを見ていないのか、そいつは眠そうな目をパチクリして、

「パパさんなんですか？ ママさんに見えます」

「ママさんって……んな歳でもねえよ。見てみそ、このピチピチの玉のような肌をよ」

「否定です。コロナのほうがピチピチなのです」

そりゃまあ、お前さんに比べたら敵わんで。

「ま、んなこたアどーでもいいワケで」

俺は背後にある、カラフルな遊具を親指で指しながら、

「悪いけれどもよ、チビチビ助。遊び相手なら、そのジャングルジムさんにでも頼んでくれ」

しかし、そいつは動かずにただひたすらと俺を見つめ続ける。

「あんだよ……。言いてえ事あるんなら素直に言ったらどうなんदैい」

「自分はコロナです。チビチビ助ではないのです」

あーそう。

「そりゃあ、すまんんだ。じゃあチョココロネちゃん、そろそろおいちゃんはお暇させてもらうよ」

言って立ち上がり、腰をポンポンと叩いていると、



「コロナです。チョコは入ってませんので、あしからず」

ぼそつと呟き、俺のスカートを掴みやがる。

なんなんだよ。何が目的なんだ、こいつは。

「わかったわかった」

やや乱暴にチビチビ助の頭をグシグシと撫でて、

「あばよ、コロ美！」

そう颯爽と立ち去ろうとするが、一向に前に進めん。

振り返ると、コロナが未だに俺のスカートを掴んでいる。

つつーか、何だこのパワー。ガキンちょの力じゃねえぞ。

「だあら、なんだってんだよ!？」

俺が語気を荒げると、そいつは一瞬ビクつとしたあと、

「コ、コロナは……喉が渴いたのです」

指をくわえながら、チラツと公園中央あたりの水飲み場を一瞥する。

「ああ？　するつてえと、おめえさん俺にあそこへ連れて行ってもらいてえのか？」

> i 1 9 3 0 3 — 1 7 6 1 <

眉をひそめる俺に、コロナはコクンと頷いた。

まあ、確かに水が出る場所はやや高い位置にあるな。

このチビチビ助なら抱っこしてやらなければ届かないだろう。

それくらいなら　そう考えていると、

「……やつぱ、いいのです。否定するです」

急にそいつは首をぶんぶん振って、俺のスカートから手を離れた。

「ごめんなさい、ママさん」

探さないでください、と続けてトボトボと歩き去っていく。

一体なんの心境の変化があったのか。

ま、これで邪魔者は居なくなったな。

邪魔者は　。

その時、俺の頭の中に嫌な思い出がよみがえった。

久しく忘れていた、あの吐き気のするようないり取りがリフレインする。

「……あー、マジ面倒くせエ」

俺はスカートのポケットを探った。

こちらの世界に召還される前、確か俺はコンビニへと買い物に行くところだった。

そこらへんの記憶が途絶えている為、多分その途中で俺はこちらに召還させられたのだろう。

だから、確信はあった。

「四百円と、ひいふうみい……三十円か。この世界の自動販売機、日本の金使いりゃいいけど」

俺は小銭をもう一度ポケットに押し込み、

「この俺が、センチティブに」

自分の柄にもない行動に嘲笑しつつ、あのチビチビ助を探すことにした。

+  
+  
+

程なくしてそいつは見つかった。

そりゃあ、同じ公園内でブランコを一人で漕いでいたからな。

探してくれるなと言う方が無理がある。

「おい、コロ美。行くぞ」

声をかけるとそいつはビックリしたように顔を上げた。

「え？」

コロナの前に腰を下ろす。その時、一瞬彼女が目をつぶったように見えた。

多分、恐がっているのかもしれない。いや、絶対だな。

そりゃあ前の世界では散々恐がられてはきたが……なんだろうな、この胸の痛みは。

ただの成長痛だと思いたいところだがね。

「ああ、そうか。こうだな」

くるりと回転し、背中を見せる。

「もしかして、おんぶですか？」

「肯定するぞ」

「で、でも」

「乗らねえなら、今日の営業は終わりだ。」

さっき無線で、空いてるようなら三丁目の山川さんに乗せてくれ

って頼まれたもんでさア」

テキトーに言うと、

「の、乗るですっ！」

そう背中にダイブを決め込むコロナ。

「軽い軽い」

よっこいせとおんぶし直して、立ち上がる。

さあて、自販機はどこかね。

+  
+  
+

その後、なんとか自販機でジュースを買えた俺たちは、先ほどの公園のベンチへと舞い戻っていた。

「うめえーか？」

ついでにと自分の分を買ってきた八十円で二個入りの乳酸菌飲料を呷った後、訊いてみる。

コロナは両手でペットボトルを掴みながら、

「肯定、ガボガボ。美味しい、ガボガボ。れす」

「いや、無理に声を出さんでもいい。こんな公園のと真ん中で溺れ死んでもらっても困る」

しかしまあ、どんだけ喉が渴いてたのやら。

みるみるうちにボトル内のはちみつレモンジュースが無くなっていく。

やがて、

「けぷ」

と小さなゲップをすると、ペットボトルを下げ、同時に頭も下げる。

「ありがとうございます、ママさん。完膚無きまでに幸せでした」

「いささかに間違えているような気も否めないが、まあ喜んでもらえて何より。」

あと俺はまだママって歳でもなけりゃあ、性別でもねえから。そこんところ宜しくってなもんで一つ」

さて、いい加減に時間を食いすぎたな。あのバカ猫にどやされるのもシャクだし。

そろそろ、ガキのお守りはこれくらいでいいだろ。

「んじゃあ、今度こそあばよチビチビ助」

頭をポンポンと優しく撫で、

「……悪かったな。さっきは恐がらせちゃって」

一応言っておく。別に本心ではないからな。

親父に女子供を泣かせるなって言われたからさ、ただそれだけの話だ。

今度こそすんなり帰してくれるだろうと踏んでいた俺だったが、



「ママ、ううん。パパさん」

再びスカートを掴まれ、前につんのめってしまつた。

「次はなんだア？ ションベンに連れてってなんざぬかしやがつたら」

やれやれと振り向くと、

「目、目がピカってる!？」

俺はギョっとして半歩さがった。

なぜならコロナの緑眼がライトのように光っていたからだ。

比喩などの表現ではなく、マジで明滅しているワケで……軽くホラーの領域入ってるぞ、こりゃあ。

「……来てください。渡したいモノがあるのです」

度肝を抜かしている俺をコロナがさらりと促す。

来てください、と言われてもなア。

「そう仰られましても。

親父に、知らない子供について行ったり、物を貰ったりしたらダメと言われているもんでさア。

いやはや、色々な意味でね。今のご時世」

と。

おどけて言ってみるが、

「パパさんには無くてはならない、とっても大切なモノです。

お願いです、コロナを信じてみちゃってください。はちみつレモンのお礼なんです」

「そらまたご丁寧に。……どうしてもって、ワケかい？」

首肯を一つ。

「わあーったよ、そんなに遠くないなら行ってみるさ」

だって。そう言うしかねえじゃん。

あんな、どこを見ているのかわからないような瞳で、口を真一文字に結んじやってさ。

逆らったなら何をされるか。なんていうのか、アレを感じるぜ。ええとアレは。

「ぶれっしゃあ」

「そうそう、プレッシャーだ！　って、ちょい待ち。ひょっとしておめえさん人の心が読めるのか？」

嘘だろ、おい。エスパー少女って奴か？

いや待てよ、もし読めるとしたら。

ふむ。

こいつをさらって一儲けできるかも……いや、その前に帰れないんだっつーの。

「否定しますです。パパさんだから読めるのかもです」

なんじゃそりゃ。俺の心だから読めるって、どういう意味だよ。

俺が首をかしげていると、そいつは無言のまま踵を返してスタスタと歩いて行ってしまった。

「お、おい！ 待てってば、コロ美！」

慌ててついて行こうとする俺に、チビチビ助が振り返って、

「あと、コロナのことをお金儲けに使おうなんて考えちゃ、めっです」

そう釘を刺されてしまった。

飛んで喋る猫とエスパー少女、中々良い金になると思ったのだが。

これはこれは。

## 第五石：その名はレイメイ

「ここなんです」

コロナが言って立ち止まった。

「なんですって、言われてもさア」

改めて周りを見渡すまでもない。

こんな何処にでもありそうな森のど真ん中で立ち止まられてもな。

もう案内は終わりましたとばかりに伸脚運動を始めたそいつに、

「若いうちからそんな運動してたら、膝痛めるだけだぜ。つか、ここに何があるってんだい。」

そもそもとして、俺に渡したい大切なモノって何なワケ？」

後ろ毛をイジりながら訊いてみると、

「あ。その質問にはコロナがお答えします」

いや、最初からお前に訊いてるんだけどな。

「えと、やっぱり説明するよりこっちはです」

言いながらごそごそとポケットに手をつ突っ込むコロナ。

やがて薄紫色の小さな手紙を取り出すと、俺にホイッと渡して、

「それ、読んで欲しいのです」

ほう。これはこれは。

キラキラに光るハートのシールで丁寧に閉じられている可愛らしい手紙。

とくりゃあ、一つしかあるめえ。

「いやはやまさか、これは恋文と呼ばれるモノかね」

そんな、からかい気味の俺の発言に、

「肯定。コロナはパパさんに一目惚れしました。

お返事待ってます、その伝説の樹の下で。ずっと、貴方を」

と指差す方向には、古びた切り株しか見当たらないワケで。

「コロ美よ。伝説の切り株なら見つけたぞ」

「では、伝説の切り株に座って手紙の内容を口に出して読んでみちやって下さい」

相変わらず掴めんチビチビ助だ。

とにかくもと、腰を下ろした俺は手紙を読んでみることにした。

「ええと。なにになに……字が汚くて読みにくいんだが」

「当店ではクレームを一切受け付けておりません。なにぶんまだ幼稚園児の身でして。

お手々があまり言うことをきかないのです」

そりゃあ難儀なことって。

しゃあねえ、なんとか解読していくか。

「て、天よい舞いあいし、ググツの利子よ今ふだだび我がもとえ蘇れ　　って、どういう意味だコレ」

眉間にしわを寄せながら手紙を舐めるように見る俺に、

「否定です。それは、天より舞い降りし傀儡の石よ、今再び我が下へ蘇れ……と読むのです」

「なあるほど。天より舞い降りし、傀儡の石よ。今再び我が下へ蘇れ、か。」

言われてみればそう読めなくもないな。というか、口で説明したほうがよっぽど早かっただろうに」

そう苦笑する俺に、

「おやおや。パパさん。今、それを口に出して言っちゃいましたね」

急に声色の変わったコロナにビクっとして顔を上げる。

「いよいよ、この時が」



コロナの眠そうな目が見開かれていた。

心なしか口元が笑っているようにも見える。

「ああ、でもまだダメなんです。あともう一言が無いと、アレは孵らない」

な、なんだよ、アレって。

「さあ、パパさん。『霊鳴』と言ってみてください。さんにーいち、はいアクション」

「……れいめい？」

促されるがままに口を突いて出た言葉、霊鳴。

何だソレ。

つーか、さっきの天より舞い降りしって、もしかして呪文とかいう類の

「ぶいつ、大当たり」

コロナがVサインを出したその時、頭上が青く光り輝いた。

眩しい光に俺はすぐさま手をかざす。が、何だこの強い光は。

目をつぶっているのにも関わらず、光が我さきにと俺の網膜へ飛び込んで来やがる。

「パパさん、そのまま左手を前に出してみて下さい。何か触れるモノがあると思うです」

何かって。ええっと。

ああ、あつたぞ。これか？

ほんのりと暖かい石のようなモノを掴む。

すると、たちまち光が消えていった。

やがて目の慣れた俺は、その石をじっくりと観察してみる。

蒼くて透明な手の平サイズの石。輝き方がガラス細工のそれではない。まさか宝石か？

だが、何と言ったらいいのか。物自体は良いのだが状態がボロっちいだ。

ところどころに亀裂が走っていたり、赤いコケが付着していたり。

あと、やけに長細い藻屑が幾つも巻きついている。

「……ずっと、冷たい海の底に沈んでいたのです。かわいそうに」

もしかして俺に渡したい大切なモノって、この霊鳴とかいう石のことか？

コロナは頷きながら、

「肯定。正式な呼び名は試作型霊鳴石『弐式』なんです」

へえ。ご大層な名前だねエ。試作型という部分が、いささかに気にはなるが。

で、この石つころは何の使い道があるんだ？

「それはただの石つころではないのです。さっきの手紙の続き、読んでみちやってください」

草むらから手紙を拾い、続きを読んでもみる。

そこには、コロナの字とは似ても似つかないかすれた文字でこう書かれていた。

「式式封印解除の呪文をここに記す      イグリネーション」

「イグリ……ネーション」

呟いたその瞬間、天から青い閃光が降り注ぎ、そして俺の手元を包み込んだ。

「な、な、なんだアア!？」

凄まじい勢いで全身の力が抜けていく。

まるで俺のエネルギーが石に吸い取られていくかのような……待て待て、こりゃ本気で立っていらねエぞ。

ちよちよちよ、いや、マジで、吸い取り過ぎだって      !

> i 2 1 4 9 5 — 1 7 6 1 <

「あ、あうっ……」

ペタンとすっかり腰が抜けてしまった俺の手の中に先ほどの石の姿はなく、

代わりにヘンテコな蒼い杖が握られていた。

「パパさん、杖の封印解除よくできました」

涙目で見上げた俺の頭をコロナがよしよしと撫でる。

こ、こんにやろおお。何がよくできました、だ！

何か文句の言葉でもぶつけてやろうかと思ったその時、

「魔法少女、おめでとー」

と、もう一度Vサインを決めながら更に気の抜けるようなことを言い放ちやがった。

無表情づらのクセに満足げな空気がひしひしと伝わってくる。

上手くしてやったり、ってかあ？

ちくしょう……。



## 第六石：対決！ゆりなvsコロナ

パキッ。

音のした場所へ顔を向けると、ゆりなが驚いた表情で立っていた。

俺の視線に気付いたのか、そいつは慌てて樹の陰に隠れると、

「つ、つくつくほーし。みーんみーん。ほーほーほっほーっ」

また旧式なとぼけ方を。

つーか最後のそれはセミじゃないだろ。朝によく鳴いてるアレだ、アレ。

「にゃ、にゃははは。バレちゃった」

「ったく。そんなところでコソコソとよオ」

「わ、ごめんなさい。ついビックリして隠れちゃった。すっごい光が見えたから走ってきたんだけど……」。

あのー。しゃっちゃん、もしかしてそれって、杖　だったり？」

おずおずと訊くゆりなに、

「ま、魔法少女……はじめました」

気の抜けたVサインをしつつ、春なので付け足して言ってみる。  
何故、春だから魔法少女をはじめなのか我ながらよくわからんが。

「ふ、ふえええええ！　しゃっちゃん、本気なの！？」

本気もなにも。

驚きたいのは俺のほうだつての。

積みもり積みもった愚痴をぶちまけたいのは山々なんだけれども、その前にちよつと肩を貸してくれ。

こ、腰が抜けちまってさア。

「う、うん。　きゃっ！」

トテトテと走り寄ってきたゆりなが悲鳴をあげて盛大にズッコケた。



「おい、大丈夫か？」

「だいじよばなあい……。しゃっちゃん、足がちべたくて動かないよあ」

涙目で訴えかけるゆりなの足元を見ると、何やら黄緑色の石が足を固めていた。

「それ、コロナの魔法です。つめた〜い、氷なんです」

「いやいやいや。」

「なんです、じゃあないだろ。」

「どーいうつもりなんでイ、コロ美。悪ふざけだかなんだか知らねえが、今すぐ魔法を解いてやれって！」

すると、

「否定。コロナは、今からその旧魔法少女さんに宣戦布告します。魔法少女はパパさん一人で十分なんです」

言いながら浮かび上がるコロナに、蝶のような光り輝く羽が生まれる。

おい、マジかよ。もしかなくても、これって戦闘体勢ってヤツじゃないのか。

「な、なんでそうなるのーっ!？」

俺とゆりなが同時に声を張り上げるが、そいつはあっけらかんと

「なんでって、何となくです。なんか貴女を見ているとモヤモヤするのです。

とにかく魔法少女はパパさんだけで十分だと判断しました」

ど、どこをどう見て、そういう判断に至ったんだお前は。

俺はただ腰を抜かしているだけだぜ、なんとも情けない話だけれども。

「ま。そゆことなので。さっさと死んじやってください」

言った直後、

「待てえええい！　こんの、バカコロナー！！」

凄まじいスピードで飛んできたクロエがチビチビ助の腹へと突進をします。

不意の一撃にコロナの羽は消え、そのまま地面へと叩きつけられた。

しっかしながら。

止めるためとはいえ、少しやりすぎじゃあないのか。相手は子供だぜ。

「バーロー。姿かたちはどうであれ、オレたち霊獣は、そうやすやすと傷つかないってーの」

「えっ、待て待て。オレたちって事は……。もしかして、お前もあのチビチビ助も霊獣ってヤツなのか？」

俺に続いてゆりなも、

「じゃあ、あの子って朝の蝶々さんの！？」

顔を見合わせる俺たちの間に黒猫がふよよと入って、ため息まじりにこう言った。

「い、今更、気付いたのかよ……。あいつは三番石であるエメラルドに封印されていた緑蝶コロナだ。

能力は、『水』と『氷』。見た目はチビガキだが、七大魔宝石のうちの一つだからな。油断は出来ねえぜ」

そんな情報を一気に詰め込まれても。なんだよ、七大人たらつて。

「どうやら説明している時間は無いみたいだぜ」

クイツと肉球が指す方向にはむくれっ面のコロナがあひる座りで、

「むー、ぼんぼん痛いのです。はちみつレモンが出ちゃいそうです」

こっちを睨みつけていた。と言っても、あの眠そうな目だから迫力は皆無に等しい。

それより、もったいないから出すなよ。

百五十円もしたんだぞ、根性で飲み込め。そしてお前の血となり肉となる。

「肯定です。パパさん。園児のド根性みせます」

なんてお腹をさすりながら口をモゴモゴ動かしているコロナを背に、

「今のうちだ、杖を呼んで戦うぞ。やれるな、ポニ子。足かせの氷魔法はもう解けているハズだ」

ズッコケたままの姿勢でポカーンとしていたゆりなが、ゆっくりと自分を指差して、

「ふえつ。ぼ、ボクがやるの？」

「あつたりめーの酢漬けイカ！

このバカシラガは杖はあれども魔宝石を持ってねえんだ、今やれるのはポニ子しかいねえ！」

「……はう」

いやはや、面目ねエ。

しかし、まあ。ここは一つ、先輩のお手並み拝見ってことで。

腰を抜かしながらゆるりと観戦させてもらうことにするさね。

「ポニ子の動きをよく見ておけよ、シラガ娘。おめえも遅かれ早かれやってもらうんだからな」

へえへえ。わかりましたんで。

「はうう、なんか緊張するよう。しゃっちゃん、あんまりジーツと見ないで」

顔を真っ赤に染めて、ぼりぼりと頬をかくゆりなに、

「あの。巻きでお願いします」

指をくるくる回しながらコロナが言う。

どこで覚えたんだ、そんな業界用語。

「ふあ、ごめんなさい。も、もしかして待ってくれてるの?」

「肯定。一応、フェアでやらないと楽しくないですから。あと、コロナは霊獣なので手加減なんてしないでください。本気で来ても大丈夫です。どんとこーい」

それを聞いてホッとしたのか、

「えへへ。そっか、じゃあ全力で頑張るねっ！」

ゆりなはそう言うと、手を高らかに掲げて、

「来てっ、霊冥！」

数秒も経たないうちに、黒い宝石が空から飛んでくる。

呼べば飛んで来るって……今時の魔法少女は進んでるんだな。

そして、それを掴むと同時にゆりなはこう叫んだ。

「イグティレエト！」

黒い光がゆりなの手元を包み込む。

ほほう。これは、また。俺のときと呪文が少し違うようだ。

慣れたもんで、宝石をさっさと黒杖へ変化させると流れのままに、

「クーちゃん、お願いっ」

「あいよっ!」

くると空中で黒猫が一回転すると、藍色の宝石へと姿が変わった。

ん　宝石？

さっきこの猫は自分を霊獣と言っていたよな。こいつも七大人にとやらだったりするのかな？

するつてえと、七匹の霊獣のうち二匹はこの場に居るつてことで……なんだか案外すぐ集まりそうだな。

そんなことを考えていると、

「せーのっ」

ゆりなが杖を両手で持ち上げ、宝石へと勢い良く振り下ろした。

その瞬間、割れた宝石の中から黒い大蛇のような稲妻が発生し、



ゆりなを頭から喰らう。

なんて、迫力だ。予想以上に派手つつーか、コレ大丈夫なのかよ。クロエが変身した宝石は割れちまうし、ゆりなは雷に喰われるしで。

咄然としていると、ゆりなの全身を覆っていた稲妻が徐々に小さくなっていく。

「お、おお……」

稲妻が完全に消えると、そこには黒いドレスに身を包んだゆりなの姿があった。

さっきまではパジャマにどてら姿だったのに、いつの間にそんな豪華な衣装に着替えたんだ。

藍色に煌めくオーラがゆりなの体を彩り、時たま黒い稲光がバチバチと周りに発生している。

> i 2 2 4 0 9 — 1 7 6 1 <

こりゃあ、嘆声をもらしてしまうのも無理はないって。

なるほどな。これが魔法少女、ってヤツ……ね。

「お待たせ」

さっきまでの調子はどこへやら。

急に凛々しい顔つきになったゆりなは、杖をブンブンと振り回して、

「行くよ」

息をつく間もなく、跳躍した。

## 第七石：雷と氷、どっちが強い？

「よし！ 『アイスウォーター』 ちゃん、かかってきなさい！」

ふよふよと滞空しながら、

「クロエが魂よ、我に漆黒の雷を宿せっ」

ゆりなが叫ぶと同時に、杖に黒い電流が走った。

何か攻撃を繰り出すのか？

期待をしつつ待ってみるが、

「えーと……しゃっちゃん。それから、なんて言うんだっけ」

「あ、あのなア……」

まったく、俺に訊くなって。

さっきは少しばかり凜々しい顔つきになったなと思ったのだが、  
いやはや。

「イカズチ？ 憑いてるのはお姉ちゃまなのに。あ、そっか。今回は……」

目は眠そうなままだが、怪訝そうに眉をピクッと動かして、

「分が悪いかもです。だったら、」

自分の手の平に息を吹きかける。

「こりゃあ、なにしてんだ？」

「ふうーっ」

おお。見る見るうちに小さな氷のつぶてが生まれていくではないか。

中々に便利そうな魔法ではあるな。夏場とか特にもってこいだ。

「いやいや。それよりも。」

ゆりなはさつき『アイスウォーター』とコロ美を呼んでいたな。

多分、察するにクロエから教わった異名とかだろう。

氷と水の使い手らしいからな。

氷に、水か……一体どんなエグい攻撃をするんだろっねエ？

「できた」

やがて完成した氷の塊を握りしめると、コロナが跳躍  
いやコロナは飛翔と言ったほうが正しいか。

煌めく羽を羽ばたかせて、ぐんぐんゆりなに接近し、

「ほよ？」

ぼけつと見上げたゆりなの服、胸元を引っ張ると、

「ポイ捨てごめんです」

氷を入れた。

「ひゃああああ！ つめたーいっ！」

……そして墜落するゆりな。

「こ、今度は背中の方に移動してる！ ひーん、一張羅がビショビショだよ」

なんて落ちたあともドレスをばっさばっさやりながら氷を取り出そうと格闘している。

あー……。

すまないが、ちいっとばっかし言わせてくれ。

「って、なんなんだア！ この拍子抜けするようなバトルは！

チビ助、お前それでも魔法少女のプロかつ」

「どうわってー、魔法出すときの呪文忘れちゃったんだもん。それにプロじゃないしい」

ぷーっと頬をふくらますそいつに、

「……旧魔法少女さん。呪文は、『ぽよん、ぽいぽい、ぽん』なのです。」

ちゃんと取り扱い説明書の十三ページに載ってます。予習しとかないと、めっですよ」

若干、呆れた口調のコロナが言った。

「つーか取説なんてモンがあるのかい。」

「あ。そうそう、それぞれ！　ありがとうアイスウォーターちゃん」

「お礼はいいので。呪文でコロナに攻撃お願いします。  
ちよっと旧魔法少女さんがどれくらい魔力あるのか確かめてみた  
いので」

「うん、いーよ。でもちよっと、休憩ね。疲れちゃった」

「……肯定するです。コロナも久々に羽を伸ばして背中が痛いので  
す」

「にやはは、霊獣さんも大変なんだねー。」

その羽がつくいーけど、肩こっちゃいそうかも」

「それもあるですけど、鱗粉が多い日はかゆくてたまらないのが大  
変です」

「ふえー、そうなんだあ」

なんてほのぼのと談笑し始めたではないか。

こ、こいつらには緊迫感ってモンが足りねエ。

つかあああ！ 魔法少女ってヤツア、こんなでいいのかよ……。

+ + +

数分後。

「あのよお、おめえさん方、いつまでダベってるつもりだい？」

痺れを切らし、ため息がてら言ってみる。

すると、コロナがハツとした様子で、

「し、しまったです。危うく懷柔されちゃうところでした。旧魔法少女さんおそろべし。」

さあ、休憩終わりです。はやく魔法どーんと来いです！」



立ち上がり、憤然と両手を広げるチビチビ助に、

「え……うん」

立ち上がり、悄然と杖を構えるチビ助。

足元に小さめの黒い魔法陣が浮かび上がった。

いよいよ、マトモな魔法が間近で見られるな。

彼女は一つ深呼吸をした後、

「ぽおーよん、ばいばいー、ぽんっ！　らいらい、『ライトニング』！」

振った杖から、やる気のかけらも感じられない電撃がちよろつと出た。

そいつはコロナを避けるように身をくねらせると、はるか空の向こうに消えてしまった。

なんなんスか今の。

「なーんでイなんでイ、登場は派手なクセに魔法はからっきし、」

俺が言い終えるよりも前に、

「……否定。それ、本気なのですか？」

苛立ちの混じった声に遮られた。

コロナは両手を広げたまま、キツとゆりなを睨みつけている。

あのトロンとした目ではない。

なんか知らんが、口を出せる雰囲気じゃなさそうだ。

「にやはは。ごめんね、あれがボクの本気なんだよう。  
まだこういうの全然慣れてなくて」

笑いながら頭をかくゆりなに、

「そんなウソで騙されません。貴女の素質からして、あんな魔法  
。」

コロナをバカにしているとは思えません」

「……ううん、バカにしてなんかないよ。」

きつとキミは霊獣さんだから、ボクが本気で雷を出してもへっちゃらだったと思う」

でも、と付け足してゆりなは微笑んだ。

「痛いよね。いくら霊獣さんは丈夫だって言っても」

「…………え？」

コロナの服についた砂埃を優しくポンポンと手で落としながら、

「さっきね、お話してて思ったんだ。どうして戦わなきゃいけないんだろう、

こんなに楽しくお喋りが出来るんだもん、きつとすぐに仲良くなれるのになあって。

クーちゃんからは、霊獣さんはとっても怖いモノだって教わったんだけど…………。

そうは思えなかったの、少なくともキミはね」

それじゃあ、あのカミナリは傷つけないためにワザと外したってわけだったのか。

「旧魔法少女さん…………」

そう呟くと、俯いてしまった。

おやおや 仕方ねえな。

ようやく腰も落ち着いた俺は立ち上がって、

「ま。ま。霊獣だの厄災だのつつつても、姿が姿だからなア。  
俺様だって、こんなちんちくりんに魔法ぶつ放したくねーし。気  
が引けるってそりゃ」

コロナの頭をペシペシ叩きながら言ってる。

「ば、パパさん……」

「えへへ。しゃっちゃんの言つとおり、ちっちゃんからっていつの  
もあるかも。」

あと……それとなんだか、キミが無理をしてるような気がしたの」

無理って、どっいうこった？

俺が訊くと、ゆりなはうーんと考える素振りをみせて、

「なんていうのかなあ。」

上手く言えないけど、ほんとにアイスウォーターちゃんはボクと戦いたいのかなあって」

ふうむ。

確かに、なんとなくモヤモヤするから、で宣戦布告はオカシイよな。

それに死んじやってくださいって言ったワリには、戦わずによくわからん行動ばかりとっていたし。

「ひ、否定です。考えすぎなのです。」

……コロナは、ただ旧魔法少女さんの力がどれだけあるのか確かめたかったのです。

確かめたらすぐにでも貴女を倒すです」

だよ。

さて、どうするチビ助。

「そっか。でも、ボクはキミに魔法うちたくないし……。じゃ、こっしょーよ！」

これからボクが石を集めるときに一緒についてくるの。

近くで魔法を見ればボクの力を確かめられるんじゃないかな」

「それって、旧魔法少女さんと契約しろってことですか？  
……否定です。や、なのです」

と、ぷいっとそっぽを向いてしまった。

だが、ゆりなはニッコリ笑顔で首を振って、

「んーん。ボクじゃなくって新魔法少女さんの、しゃっちゃんとかだよ」

杖で俺を指した。

「おいおい、人を杖で指してくれるなよ。お行儀が悪い……って、えええっ!？」

どどどどという意味だ、そいつア!

俺が困惑していると、コロナがこちらに振り返って、

「それなら肯定です。パパさんとなら喜んで事です。  
ふつつかものですが、ヨロシクお願い致しますのです」

丁寧なお辞儀をぶちかましがった。

いやいやいや、待て待て。

俺にだって選ぶ権利つつもんが……いや、そうじゃなくてだな。  
むしろ、それ以前に魔法使いをやりたくねーんだってエの。

「わーいつ、しゃっちゃん、わーい！ これで杖も霊獣さんもバツ  
チリだね、ぶいつ！」

> i 2 2 6 9 4 — 1 7 6 1 <

だね、って言われましても。

「だからよオ、俺は……」

「パパさん。旧魔法少女さんに負けないように、コロナと力を合わせ  
て頑張るです。」

えいえいおー、ぶいぶいつ」

こ、こいつら、人の話を聞きやしねエ。

しかも二人してVサインをかましやがって。

それ、この世界で流行ってるのかよ。

……いやはや。しかしながらに。

いよいよマズいかもしれないな、このままだと……。



## 第八石：魔法少女なんて絶対になりたくない！

今晩はゆりなの家に泊めてもらうことになった。

つつーか、帰る家はあれども帰り方がわからねエからな。

しばらくは厄介になるしかあるめエ……チビ助の家の人が承諾してくれればの話だけでも。

「ふぁー……。もうお日様沈んじやいそうだね。  
今日はいっぱい歩き回って疲れちゃった」

「へへ。甘いぜ、ぽに子。これからは、もっと動き回ってもらうことになるからな。」

覚悟しておくんだぜ」

「おっけー。どーんとこーい！　だよっ」

なんていう話をしている黒猫とゆりなの後ろに、両手を後ろ頭に組んでの俺。

そして、その後ろには、

「パパさん。コロナも何かパパさんとお話したいのです」

「……」

「あ、あんなところにUFOが！　パパさん、UFOっ。未確認飛行物体なのです。」

「パパさん知ってましたか、UFOの略は『うつそー！？　フライング……お盆？』なんです」

「……」

「間違えたです。さっき飛んだのはペヤングのほうでした。」

「かやくを麺の下にしてお湯を入れると、かやくが蓋につかなくて美味しいアレです」

「よちよち着いてきながら一人盛り上がってる園児。」

「やれやれだな。」

「このガキンちょと俺様が契約ねエ……子守の間違いじゃあねえのか。」

「ほんと頭がイテエゼ。」

「否定。まだ正式な契約は結ばれてないので、パパさんはただいま不完全な魔法少女です。」

でも、簡単なんです。ちょっと呪文を唱えて頂ければ、すぐにもコロナはパパさんのものなのです。

あ、どうせなら今歩きながら済ませちゃうです。えっと

なんだ、こいつと契約を結ばない限り、俺は魔法使いじゃあないってことか。

……そいつはア、良いことをきいたぜ。

「ごそごとポケットから何か（きつと呪文が書かれたメモだろう）を取り出そうとしたそいつに、

「ざけんなつ、魔法少女なんて誰がやるかってんでえい！  
耳の穴かっぽじって良く聞きなア。」

はつきり言っぜ、俺はおめえさんと契約する気なんぞ微塵もありやしねえ！

そこんところ宜しくつてなもんで一つ、よしなにイ！」

> i 2 3 6 4 9 — 1 7 6 1 <

すこんだ俺に、コロナはしゅんと肩を落としてしまった。

とぼとぼついてくる姿に若干だが言い過ぎた感が否めないが、い

やはや。

だって、やりたくねーものはやりたくないんだからさ。

……しょうがねえじゃん。

しばらく歩くと、やがてゆりなの家の前に到着した。

「えへへ。ほいじゃあ、しゃっちゃん、アイスウォーターちゃん。ちよっち待っててね。」

お姉ちゃんに、お泊り会しても大丈夫か訊いてみるから……うわーいつ！」

そう言っただけで元気に家の中へ突撃していくチビ助。

お泊り会っつーか、一日だけじゃあいささに困るんだが。

明日にでも元の世界に戻る方法が見つかれば話は別だけれどもよオ……。

俺だって別に好きで居候したいワケじゃねエし。

ん？

お姉ちゃんって、フツーこういう事は母親か父親に了承を得るものじゃないのか？

首をかしげていると、急に扉がバンツと開いて、

「あらあら、まあまあ！　なんて可愛らしいお友達なのでしょう…  
っ！

天使さんたちなのですっ、欣喜雀躍ですっ！」

何とも大げさな人が出てきた。

セーラー服の上にエプロン、片手にはお玉といった姿の女性。

背格好や服を見るに、おそらく高校生くらいだろう。

ゆりなと同じ長い黒髪を後ろで縛っており、目はパツチリとして  
いて大きい。

大きいといえば、胸がすさまじいド迫力だ。

ははは……俺らとは雲泥の差だねエ、こりゃ。

「お姉ちゃん、この子がシャクヤクちゃん。ボクはしゃっちゃんっ  
て呼んでるのっ。」

今日泊まってもいいよね」

「えーと、はじめまして、シャクヤクといいます。恐縮ですが今日  
一日どうか……」

言いかけたところで、ゆりなお姉さんが俺に抱きついてきて、

「あらあらっ！ 白くて小っちゃくて、ふわふわな柔らかい髪が可愛らしいですっ！

もちろん、承知なんですっ」

頭を撫でながら言った。

了承はまことに有難い話だが、ちよいとばかり苦しいぜ旦那…  
…息がだねエ。

「わーい！ でね、この子がコロナちゃん。小っちゃいけどってもしっかりしたお利口さんなのっ。

今日泊まってもいいよね」

「あ。コ、コロナと申しますのです。よよよ、よろし……」

お姉さんは、パツと俺から離れると、

「まあまあっ！ もっと小っちゃくて、ぽよぽよな柔らかほっぺが可愛らしいですっ！

もちろん、承諾なんですっ」

今度はコロ美に抱きついて、頬を指でつんつん突きまくりはじめた。

「わーい！ あ、あとついでに。この猫ちゃんは段ボールで捨てられてたから拾ったの。

今日から飼ってもいいよね」

おいおい、おめエさん捨て猫扱いされてんぜエ？

俺がクロエに耳打ちをすると、一瞬だがこちらを睨みつけ、

「にゃ、にゃあーん」

ただの猫に徹した。

お姉さんの足にすり寄りながら、必死にゴロゴロと喉を鳴らしている。

ああ、そうか。彼女は一般人だから喋って姿をバラしたらまずいってワケか。

だが、いくらなんでも。友達を泊ませるのと、猫を飼うのとでは話が別だろうに。

そう簡単に了承なんて

「承允なのですっ!」

って、オイイイ!

彼女はそれだけ言うと、クロエを抱き上げ、子供をあやすかのよう  
にゆらゆらと揺らし始めた。

「ねーんねーん、ころーりーよ。おこーろーりーよー」

なんとも、まあ……なぜ早々に寝かしつける作業に入ったのか。

よくわからんが、一つ言えることは、この姉にしてこの妹ありつ  
てところだな。

肩をすくめて、ついコロナと顔を見合わせてしまった。

「パ、パパさん。コロナはびっくりなんです。ほっぺがへっこんで  
戻ってこないのです」

うるうると涙目のコロナに、



「……俺も。自慢の髪が世紀末だぜ」

何故かモヒカンヘアになっている髪を戻しながらの俺。

しかたあるめえ、これも宿代と思いねエ。

「にはは、やったね二人ともっ！ ささ、ボクの部屋に直行っ」

ゆりなが、げんなり表情の俺たちを家に押し込みつつ、

「うっわーい！ お姉ちゃんありがとう、だーい好きっ！」

と、言った。

そしてそのすぐ後に、

「お姉ちゃんもなのですよーっ。

あ、ゆっちゃん。お部屋に行く前にちゃんと手を洗ってくださいねー」

そう、のんびり口調で返ってきた。

+ + +

「だーっ、疲れたあ」

「だーっ、疲れたんですう」

部屋に着くなり、ベッドに寄りかかって俺とコロナが盛大なため息をついた。

もちろん、手はちゃんと洗ってきたぜ。

よくわからんゴシゴシの歌なんてもんを歌わされながらな。

「ふえ？　しゃっちゃん達、さっきまで元気だったのに、どーしたの？」

「さっきまでは、な」

ゆりなの頭上に浮かんだハテナマークを手でかき消しつつ、

「いいのかよ、こんな簡単に承諾して。俺たちもそうだけど、クロ

工の件とかさ。

お姉さんお人好しすぎやしねエか？」

「でも、あの方のおかげでコロナたちは屋根のあるお家でグッスリ眠れるのです。

感謝感謝なんです」

そりゃあ、そーだけでもよオ……。

いつもあんな調子なのかい？

「うん、お姉ちゃんはいつでも誰にでもあんな感じで、とーっても優しいの。

ボクの自慢のお姉ちゃんなんだよう。はうー」

なんて周りに花を咲かしている。

「ふうん、羨ましいこつて。俺は一人っ子だからよオ。

あ、一応お父さんやお母さんに改めて了承を得たほうがいいかもな。

やっぱり一家の長が知らねエってのはマズイと思うしさア」

そう言つと、一拍置いてゆりなが力なく笑った。

「……にやはは。ウチ、お父さんもお母さんもないの。  
今はボクとお姉ちゃんの二人暮らしなんだ。だから二人とも伸び  
伸び過ごしてもらってヘーキだよ」

「あ……。す、すまねえ。余計なこと言っちゃって」

頭を下げると、

「う、ううん！　いないって言っても、お仕事の都合で海外に行っ  
てるだけだからっ。

「ごめんね、しゃっちゃん。ヘンな心配させちゃって。あはははっ」

とは言っけれども、寂しいのには変わらないだろうに。

どちらか片方ではなく、両親そろって海外なんてな。いつたい、  
どんな仕事なのだろうか。

だが、ゆりながあまりにもカラカラと笑うモンだから、

「そっか。わりい、わりい」

俺もつられて一緒に笑ってしまった。

すると、コロナが笑いあう俺たちを不思議そうに交互に見て、

「二人とも、何を謝ってるのですか。楽しそうです、コロナもごめんねゴツゴツしたいのです」

なんて言うもんだから、またおかしくなって二人で笑ってしまっ  
た。

+ + +

「……おめえら、楽しそうだな。オレがひどい目に合ってるっつー  
のによお。」

「まったく、あの嬢ちゃん加減つてもんを知らねーのか」

部屋に転がり込んでくるや否や、開口一番グチを放つ黒猫。

「加減つて、何かあったのですか。お姉ちゃま」

コロナが訊くと、クロエは気だるそうに肉球で自分の肩をポンポンと叩きながら、

「おう、コロ助。よくぞきてくれた。あの後、何十もの子守唄を歌いやがったんだぜ。」

それも近所に聞こえるバカデカい声でよお……恥ずかしいったらありやしねー。

こちらら睡眠通り越して永眠する寸前だったってーのに、おめえらときたら――

俺とゆりなの驚愕顔に気づいたのかクロエはびくっと毛を逆立てて、

「あ、あんだよ、そのツラは」

「だって、ねえ。しゃっちゃん聞いたよね？」

ゆりながひきつった顔で俺に振る。

「……ああ、聞いたぜエ。しかと聞いたぜエ」

そう。

コロ美は先ほど確かにコイツのことを『お姉ちゃま』と呼んだ。

腕を組み、うんうんと頷いて俺はこう言った。

「クロエ、おめえさんって野郎は……まさかメス猫だったとはなァ！  
へそが茶を沸かすとは、まさにこの事よォ」

続いてゆりなも、

「クーちゃん、かわいいーっ！　メスだったんだあ。  
わーい、メス猫メス猫ー！　メス猫クーちゃんっ」

そうはしゃぐ俺らに、

「にゃあああ！　メス猫って言うなあああ！  
侮辱の言葉だぞ、てめーら無邪気にもコノヤロー」

いやはや、言動があまりにも荒々しいもんで。

まさか、メスだったとはな……いささかに信じられねエぜ。

「だから、確かめる必要があるってなもんで」

言って、グイッとばっかしクロエの足を広げた俺に、

「ば、バカっ！ あにすんだよっ！」

すかさず肉球フックが飛んできた。

「いつひっひ。てめえだつて、さんざん俺の事からかってくれただろ。」

そのお返しつてだけの話さ」

頬をさすりながら言つてやったが、どうやらマジらしいな。

この反応　ま、別に本心としちゃあどつちでもいいことなんだが。

「うん、どつちでもクーちゃんはクーちゃんだもんね。

あはは、でもなんだか可愛いかも。女の子なのに『オレ』だなんてっ」

ゆりながクロエを高い高いしながら言い、

「可愛いなあ？　女ならせめて女らしく。

もっと、可愛いのある言葉づかいにした方がいいぜ、いささかによオ」



持ち上げられた黒猫の喉をポリポリかきながら俺が続ける。

対して黒猫は、『けっ!』と尻尾をおったてて、

「おめーらだけには、ぜってええええ言われたくねえセリフ!」

と、怒鳴った。

……そりゃまあ、ごもつともで。

## 第九石：お風呂は命のなんとやら

しばらくの間、くつろいだ後、

「あ、そーだ。今日はお姉ちゃんのご飯の当番だから出来上がるのに少し時間かかるかも。」

その前にお風呂入っちゃわない？」

ゆりなの提案に否定するものなどおらず、みんな一様に首を縦に振る。

「へへっ、今日は飛びまくって汗だからなあ。  
とつとと、さっぱりしてえーぜ」

「肯定。コロナも汗かいちゃったのです。ベトベトなんです」

俺も二匹の霊獣に続いて、

「お、いいねエ。風呂は命の洗濯って言うしな。  
俺も入らせてもらうとするよ、慎ましくさ」

さて、そこで問題になるのは誰が一番風呂を獲得するのか、である。

まあ。ここはやはり、主であるゆりなで決まりだろうな。

となると、二番手は誰が入るのかという話になるのだが。

「お風呂だお風呂だ、わーい！ みんなで一緒にお風呂だ、わーいっ！」

ん？

ベッドの上でぴよんぴよん跳ねるゆりなを見上げて、

「ちょい待ち。  
みんなで一緒って、どういうことだ。銭湯にでも赴くってことかい？」

そんな俺の質問に、

「んーん。  
ボクとクーちゃんとしゃっちゃんとアイスウォーターちゃんの四人でうちのお風呂入るの」

あっけらかんと答えるチビ助。

「いやいやいや、忘れてくれるなよ。俺は男だぜ！  
姿はこんなチンチクリンになっちまったけど、中身は超が付くほど男なんだってーの」

「ふえ？ 知ってるけど、それがどーしたの？」

そ、それがどうしたのときたもんだ……。

こいつはア、手ごわい。

「え、えーとだな。つまるところの……そうだ、俺は他人と一緒に風呂入るのが苦手なんだよ！  
なんつーか、こっばずかしくてよオ」

「ふーん？ ボクは全然恥ずかしくないけどなあ」

まだ小学生だとはいえ、ちったあ恥ずかしがってくれよ。

それに四人でなんて窮屈だろう、ゆっくり疲れもとれないぜと付け足すと、

「それもそーだね、ボクん家のお風呂あんまり広くないし。にゃははは！」

いやあ、まいったまいったと笑うゆりな。

どうやら何とか説得できたみたいだな。やれやれ。

ホッと息をついてる俺に、

「それじゃあ、もう沸いてると思うからしゃっちゃんから入ってきていいよ」

「え、俺からでいいのか？」

「うん、だって今日はしゃっちゃん感謝デーだもん！」

なんだよその、うさんくさいデーは。

クスッと笑った俺に、

「えへへ。気にしないでいいよ、ボクとクーちゃんは後から入るから。」

観たいテレビあるし……ねー、クーちゃん？」

そう頭上の黒猫に確認をとるゆりな。

黒猫は、あくびをしつつ気だるげに、

「……ああ、そうそう。オレ達は観たいテレビがあるからよ。  
ゆっくり入ってきな」

なんとなくだが、クロエは反対すると思ったんだけどな。そんなに面白い番組をやってるのか？

この世界のテレビ……どんなものなのか、いささかに観てみたい  
気もするが、いやはや。

ここは有難く一番風呂をいただきかせてもらうことにしよう。

「んじゃ、お言葉に甘えてさっそく入ってくるぜ」

「うんっ！ お風呂は階段を下りてすぐ左だよ。  
わかんなかったらお姉ちゃんに訊いてね。

バスタオルとお着替えはちよつとしてからボクが持っていくから  
っ

何から何までわりいなと言うと、ゆりなはニッコリ笑顔でVサイン

ンを繰り出した。

+ + +

脱衣所に着いた俺は、服を脱ぎつつ、

「ちっ、使いづれえ体だぜ、まったくもってよオ」

改めて自分の変わりすぎた姿に嘆息した。

筋肉皆無な白く細い足はフラフラするし、手は言うことをイマイチきいてくれない。

イマイチってどんな感じがって？

グーとパーを繰り返し出してみるが、頭に描くスピードと反応が大きく違う。

気持ちだけが先に行って、体が追いついてこないって感じがねえ。

そっぴやコロ美のヤツも似たようなこと言ってたっけか。

ぽこつと出た腹をベシベシ叩きながら、

「あーあ、俺様の美しく割れた腹筋が跡形も無い……。こんな体、とっとオサラバしてーぜ。だりいったらありゃしねエ」

風呂の引き戸を開くと、けっこう大きめの浴槽が目に入った。

「ほー。こりゃ、また中々に。俺ん家の風呂よりデカくてキレイだな」

とりあえずサクつと体を洗って湯船につかる。

> i 2 5 7 4 3 — 1 7 6 1 <

「こりゃあ、イイ湯だぜエ……」

最初は他人の風呂を使うなんて、と気が引けたが、入ってしまえば遠慮よりも快樂が勝っていた。

「しみじみ飲めばーっと、くりゃあ」



そう俺が気持ちよく歌い出したときだ、

「それ以上は歌っちゃ、『メッ』なのです」

ジーツと風呂の戸から顔だけ出して言い放つオリーブグリーンの  
ツースайдアップ。

「なーにしてんだア？ そんなところで」

「……………」

無言。

その瞳からなんだかキラキラな星が飛んできたりもしていたが、  
そいつを全て鼻息で打ち落とし、

「あいわかった。歌わないから、早く出て行っておくれ」

「……………」

それでも無言のまま意味ありげな視線を送ってくる。

「ほれほれ。もう用は済んだんだろ？ あっち行った、しっし」

俺がからかい気味に言うと、そいつはあからさまに肩を落とした。

「……肯定です」

戸が閉まった。

が、うつすらとガラス戸を通してコロナの影が見える。

しょんぼりと座っちまって、まあ。

こりやまた、まったく。わかりやすいチビチビ助だ。

「おい、コロ美。一緒に入りてーなら、素直にそう言ったらどう  
なんでえい」

俺が呼びかけると、待つてましたといわんばかりに戸が開いて、

「やっぱり、パパさんは優しいのです。コロナはもうすでに準備開始してました。ほどこきほどこき」

髪を解きながら、クール面の園児が現れた。

へえへえ、そりやどーも。

苦笑しつつ俺が頭に乗せたタオルを絞っていると、そいつが浴槽に入ってこようとした。

「おいおい、おめえさん。ちゃんと体を洗ってから浴槽につかりな  
ア」

よじ登ってくるコロナの頭を押さえつけながら言つと、そいつは  
ぶーっと頬を膨らませて、

「はやく一緒に入りたいのです。体は後から洗うです」

「それは否定、ってやつだ。浴槽は家族みんなで使うもんだからな。  
なるべくキレイな状態で次の人に回してやらなきゃいけねえ。ま、  
親父の受け売りだけど。」

それに、こちら風呂を借りてる身だし、尚更だろうよ」

びっくりしたように俺を見るコロナに言葉を続ける。

「それがイヤなら、一緒に入るのはナシだ。さてはて、どうする？」

意地悪くニヤリと笑ってやる。

すると、そいつはぶんぶんと首を横に振って、

「……やだ、パパさんと一緒に入るです。ソッコーで洗うんですっ」

「いっひっひ。良い子だ」

せかせかと夢中で洗う小さな背中を見ながら俺は思う。

こんな子供が『靈獣』だなんて儼かな名前を担いで。

まだまだ甘えたい盛りのただのガキンちょに見えるが……。

そして。

湯船に映る見慣れない少女の顔に、

「おめえさんは魔法使いだって、さ」

小さく呟いて、俺は水面を指で弾いた。

## 第十石：魔法少女の取扱説明書？

「ふああゝ。疲れた体に染み渡るんです、これがまた」

湯に浸かったコロナが年寄りのような声をあげる。

「おめえさん。言いにくいんだけど、なんで俺の上に座ってやがるんない。

これじゃあ足を伸ばしてくつろげねえぜ」

あぐらをかいた俺の足の上に、ちょこんと正座をしているそいつに言つと、

「そのまま座っちゃうと溺れちゃうんです。結構ここのお風呂深いのです」

「なら、立ったまま入りねエ」

「否定なんです。それだと、ゆっくりくつろげないです」

おい。今まさに俺がくつろげてない状態なんだが。

「……じゃあ、飛びやがね。羽出して、ちいっとばっかし浮きながら浸かりゃあいい」

「それは名案なんです。

でも羽を出すとき『うんしょ』ってリキむので、もしかしたらちよつとだけ出ちゃ、」

言いかけたところでコロ美をひょいと抱き上げ、

「わーった、わーったって。きたねー。

俺の上に座ってもいいから、くれぐれもふんばらねエでくれ」

「肯定。……えへへ」

嬉しそうに人の足の上ではしゃぎやがって、このチビチビ助め。

わざと、ああいうこと言いやがったな。

いやはやに。これじゃあ疲れが取れるどころか、増してしまう。

次は絶対一人で入ろう、変なオプションは抜きだ　そんなことを考えていると、

「パパさん。つまんなそうです」

悲しそうな目で俺を見上げながら、

「コロナと入るの、楽しくないですか？」

一瞬ぎくつとしたが、ここはハッキリと言ってやった方がお互いの為だろうさ。

「つまるところ無理な言いば、つまらないかもねえ。

あーあ、出来れば一人でゆっくりノンビリと浸かりたかったぜ」

まあこんなところか。

ちと、厳しく言い過ぎたか？

チラリと横目でチビチビ助を見やるが、そいつはあっけらかんとした様子で、

「それなら暇つぶしになるものを出すんです」

湯船から左手を突き出し、指パッチン。



すると、ポンツという音と共に何やら冊子のようなものが出てきた。

黒い表紙に、青の蛍光色で『式所有者専用』と書かれている。

「あんだア？ ゲームか何かの説明書みたいだが」

不思議がる俺に、

「これは魔法少女の取扱説明書なんです。  
いずれ成る魔法使いの予習がてら、暇つぶしに最適だと思ったのでご用意したのです」

ああ、これがあのとき言っていた取説か。

結構薄っぺらいんだな……分厚くても困るが。

「ま、やるつもりはなーけれども、暇つぶしに読んでみるか  
ねエ。」

ええと、なにになに「

それには七つの項目があり、それぞれこんなことが書かれていた。

#### 其の壱 霊鳴石について

霊鳴は呼べばいつでもどこでも飛んできます。

式式における封印解除の呪文は『イグリネーション』です。

#### 其の弐 魔法使用について

式式所有者の魔法を使うときの呪文は、

『ぶゆゆんぶゆん ぷいぷいぷう』となります。

慣れれば簡略化することもできますが、最初のうちはなるべく全て唱えましょう。

#### 其の参 使用限界について

霊鳴の中に入ってる霊薬という液体がなくなると魔法が使えなくなります。

もし使用中になくなった場合は海に戻るか、使用者の心身を休ませてください。

なお、なくなったままの状態でも魔法は使えますが、

生命エネルギーを著しく消費しますのでオススメできません。

## 其の肆 魔宝石について

魔宝石には二通りあります。  
強力な七つの大魔宝石とイミテーションと呼ばれるたくさん  
の模造魔宝石です。

## 其の伍 禁止魔宝石について

七大、模造問わずどれも魔宝石には様々な能力が秘められていま  
すが、  
中には絶対に使ってはならない禁断の魔宝石もあります。  
例として治癒系の魔宝石は全て禁止魔宝石にあたります。

## 其の陸 注意事項について

他人に正体を知られてはいけません。（ただし魔法関係者を除く）  
魔法使いであるということをバレないように周りに注意して魔法  
を使ってください。

## 其の漆 集束について

「……ん？」

そこまで読み進めて俺は頭を傾げた。

其の漆（読めねエ）という項目が、説明が無くまったくの白紙だったからだ。

「おい、コロ美。ここ何も書かれてないんだが。どうなってやがるんでい」

両手で湯をすくってひたすら俺の鎖骨にぶつけるといって、謎の一人遊びを楽しんでいるコロナに訊ねてみると、

「それはまだナイショなんです。いつの日か文字が浮き上がってくと思うんです」

「あーそう。ま、別にどーでもいいけれどもよ……っとー！」

とりあえず反撃に、手で水鉄砲よろしくお湯を飛ばしてやる。

「わっぷ。鼻に入っただす、ツーンと痛いんです」

「いっひっひ。ざまあみそらしど」

と言いつつ、湯船からあがり髪を洗う作業にとりかかるが……ど

うもあの説明書が引つかかるワケで。

説明はからつきし頭に入っていないからどうでもいいのだが、それよりも『説明書』自体がいささかにねエ。

確か、ピースが保管していたパンドラの箱が手違いでゆりなのもとに送られたんだっけか？

んで、それを開け、中の宝石を飛ばしちまったゆりながそれを集めることになった　魔法使いになって。

つまりそれは偶然の事故ってこった。それなのに、説明書って。フツーそんなもん無いだろうよ。

用意が良すぎるつつつか、これではまるで

「パパさんの考えてること面白いんです」

シャンプーをシャワーで流しつつ見上げると、コロナが無表情で俺を見下ろしていた。

「面白いつてどういうこつてィ。つか、あんまし俺の心を読んでくれるなよ。

いささかに困るぜ」

そうリンスのボトルに手をかけた瞬間、

「……パパさん、一ついいですか」

また声色が変わりやがった。

もしかしたらあの時のように目も光ってるのかもしれないが、無言でリンスをひねりだす。

見ていて気分のいいツラじゃねえし。

「あまり深く考えないほうがいいです。

パパさんは、旧魔法少女さんと一緒に散らばった石をただ回収する、

ただそれだけのお話なんです」

リンスを前髪にちまちま塗りこみながら、

「……恐縮だけでも、俺をそんなに買いかぶってくれるなよ。別になんにも考えてなければ、宝石集め云々も興味ない」

本音だ。

魔法少女？ 誰がそんなモンをやるかって。素質があるか知らねエが、俺じゃなくてもいいだろ。

そう、こいつらとの仲良しってこんなざさらさらゴメンだ。いつまでもピーチクやってられねエ。

俺は明日にでも元の世界に帰る方法を見つけて、とつとこの世界からトンスラを決め込む。

テメエらの世界はテメエらでなんとかしやがれ、ってヤツ。

「果たして、そう上手く逃げられるですかね」

コロナがくすくすと笑いやがる。

こいつ、目がピカると性格ちょっと悪くなってるねーか？

これはこれは、修正しないと。ケツは若いうちにぶてってな。

「うるへー。チビチビのクセに生意気だったの。おしおきが必要だねエ、まったくもって」

言って立ち上がり、

「……ほへっ？」

ビックリしているコロナを抱き上げてお風呂椅子にストンと座らせる。

「覚悟しろってなもんで、一つ」

シャンプーを出して、わしゃわしゃと乱暴に髪を洗ってやる。

「わわ。パ、パパさん激しいです」

「ほーれほれ」

「きゃっきゃ！そこは脇です。くくすぐったいんです」

ま。

所詮はガキンちよだと思いたいところだが。

こいつの言動抜きにしても、やはりどうも不明瞭な点が多すぎるな。

深く考えるな、とは簡単に言ってくれるが魔法使いになっちまったら深く考えざるを得ないだろうよ。

だから、これ以上面倒なことになる前に本当に逃げ出さねえと。

明日が勝負だな。



第十一石：vs第六番模造魔宝石ホバー・ザ・ルヒエル編

「九十八、九十九……百、なんです。パパさん言えたですっ」

「よし、エライエライ。んじゃ、そろそろあがるぜエ」

そう風呂からあがった俺達の前に、

「むうー……」

現れたるは、ふくれつつらのゆりな。

そいつは抱えていたバスタオルを不機嫌そうにボフッと俺に渡して、

「しゃっちゃんさー、他人と一緒に風呂入るのイヤなんじゃなかったのお？」

ジトつと見つめられ、いくらか気圧されたが俺は体を拭きながらこう言った。

「あ、ああ。そりゃあ苦手だけれども。」

どしたんだ？ ロボロフスキーハムスターみたいに頬を膨らませ  
ちまってるさア」

ゆりなのほっぺたを指でつつん突くと、そいつは反抗的にます  
ますと膨らませつつ、

「だってだって！ アイスウォーターちゃんと一緒に入ってたじゃ  
ん！  
ボクだって、しゃっちゃんと一緒に入りたかったのに……ずるい  
もん」

これはこれは。何かと思ったら、そんなことが。

別に俺は一人で入るつもり満々だったワケなのだが。

ま。ここは一丁、宿主のご機嫌を伺っておくことにするかね。

ぷいっとそっぽを向いてしまったゆりなに、

「んな、怒るなって。

……じゃあ、ほら。明日はおめえさんと一緒に入るっ！ これで  
チャラって事で一つさ」

とかなんとかテキトーに言うっておけばいいだろう。

どうせ明日には、この家から（というかこの世界から）出て行くワケだし。

すると、予想通りにそいつはケロつとした笑顔でこちらを向いて、

「わーいっ！　しゃっちゃんと一緒に風呂ー！  
絶対だよ、約束だもんねっ」

そう言って、小指を突き出してきた。

「指きりげんまーん」

こりゃまた、懐かしいっつーか。そんなのやるの小学生のとき以来だぜ。

って、いまの俺はそんなくらいのガキンちゃだったか。

なら、ガキはガキらしく振舞おうじゃあねエか。

「へいへい。わーってるって。　約束、な」

俺も小指を出してゆりなの指に絡める。

「指きりげんまん！ ウソついたら、」

流れのままフツに針千本のーます、と続けようとしたのだが、

「雷千発ぶっぱなーす。はい、指切った！」

「ちょ、ちょ、ちょい待てっ。切るな切るな。

針千本だったらまだしも、雷千発っておめえさんが言つと急にリアルすぎるんだが、おい！」

そう慌てる俺に、ゆりなは八重歯をキラッと光らせ、意地悪そうに、

「にやはあ？ どーして慌ててるのかなあ。

しゃっちゃんが、ちゃんとかーんと約束守ってくればイイだけの話じゃあん」

> i 3 0 0 8 4 — 1 7 6 1 <

ウツと、たじろいた俺に今度は後ろのチビチビ助が、

「あのですね、旧魔法少女さん。パパさんはさっきお風呂でこっ叫

んでたんです。

ふははは！ 明日にでもこの世界からとんずらバイバイするんだ  
ゼエ！

どわれが魔法使いなんてやるんだぜ！ あばよ、このペチャパイ  
キングダムがアアアって。

一体、パパさんどうしちゃったのか…… コロナはビックリなんで  
す」

お前が一体どうしちゃったんだよ。

つか、そんな怪しげな語尾つけた覚えねえぞ。

「ひつどーい！ しゅっちゃんだってハイパーペったんこじゃん！」

ハイパーペったんこて。

そんな使い方されるとは、ハイパーも思いもよらなかったろうに。

「いやはや。今の話のツッコむべき所は胸のことじゃあ無いと思う  
のだけれども。

ていうかだな、コロ美。おめえさん変な話しないでくれよな。誤  
解しちまうだろ」

言うだけ言って、我関せずとばかりにゴシゴシと、

ジジイの乾布摩擦よろしく体を拭いているコロナに苦言を呈してみるのが、

「変な話もなにも、ホントのことなんです。

パパさんはコロナたちを見捨てて逃げる気まんまんだっただのです」

ち、ちいっとばかり言い方に刺々しさが感じられるのは気のせいかな。

「えーっ！？　しゃっちゃん、霊鳴呼んだとき『魔法少女はじめました、春なので』とか、

『ここは一つ、先輩のお手並み拝見ってことで』とか言ってたから、やる気あると思ってたのにつ」

「んな、四ヶ月も前の話を蒸し返されてもよオ」

「今日のお話だもん！」

「大体さア、おめえらがコロ美と俺を契約させるうんぬんで盛り上がってるとき、

ちやーんと俺は魔法使い自体をやりたくねえって抗議してたんだぞ」

「そ、そんなの聞いてなかったもん……。ぶうつつ」

「ったく。ほれほれ、若いのにそんな顔すんなって。

眉間にシワを寄せる度に幸せが逃げちまうって親父が言ってたぜ」

グリグリとゆりなの眉間を指でこすってやる。

「そんなのより、しゃっちゃんが逃げちゃうことのほうが大問題だよっ」

幸せを、そんなのよりって言い切ってしまうなんて。

なんていうか、こういうところが子供だねエまったく。

と、肩をすくめて苦笑いしていた俺に、

「　　幸せなんて、そんなので十分だもん。いらないもん。しゃっちゃんが一緒に居てくれる方が絶対いいもん」

そう言って俯くチビ助。

こりゃあ……。『冗談を言っただけで逃げられる雰囲気でもないか。

まあ、何故だか気に入られているようで悪い気はしないのだが、

だからといって付き合う義理もない。

一日や二日の旅行とは違うんだ。

何が起こるか分からないし、いつ終わるかも分からない魔宝石集めなんざ、正直やってられん。

いつまでもこの世界にとどまって、親父に心配かけたくねえし。

中学のダチに会えなくなるのもキツイ。返してもらってないゲームもあるしさ。

そっぴやケンカでケリをつけてねえヤツもいる。(ただいま四勝五敗)

負け越しのまま逃げたら、あのヤローになんて言われるか。

そんなこんなで、俺もいささかに忙しいワケで。

なーんで、ガキのこいつに言ってもピンとこないだろうさ。

だから、俺は少々強引だが子供相手に納得させるためにはこれがベターだと思い、こう言った。

「悪いけれども、俺にも色々事情があるんだって。

おめえさん方が切羽詰ってるっつーのは、よくわかるけれどもよオ…………。

ま、あんまり『ワガママ』言わねえでくれると助かるってワケで」



その瞬間だった。

あきらかにゆりなの動揺していく様が見て取れた。

「ワガママ　？」

瞳孔が開き、先ほどまでの元気ハツラツ少女とは思えないような無表情に変わっていく。

目の光がサッと消え、どこか遠くを見ながら、

「ごめんなさい……言わないから、もうボク、『ワガママ』言わないから」

「え？」

「ちゃんと良い子になるから、ボク、ワガママなこと言わないから。だから、だから、だから」

気が抜けたようにペタンと座り込むゆりな。

「大丈夫か、どうか具合でも悪いのか？」

どうしたらいいのか狼狽している間にも、ゆりなの呼吸が荒くな  
っていく。

胸を押さえて咳き込む彼女に、何も出来ず呆然と立ちすくむ俺。

「けほっ。え、えへへ。ごめんね、しゃっちゃん。  
ボクは、だ、大丈夫だから、先にお部屋戻っていいよ……けほ  
っ、けほっ」

「……パパさん。コロナたちは大人しく立ち去るべきだと思うんで  
す」

「んなこと言ったって、放っておけねえだろ！」

そう振り向いた俺の目の前に、どこか悲しげな表情をしたクロエ  
が現れた。

「あーあ。アレを言っちまったか。いつ出てもおかしくなかったか  
らな、しゃあねえか。

クロ助の言つとおり、おめえらは部屋に戻ってな。あとはオレが  
なんとかすっから」

いつもの事だというような軽い調子で言った後、

「シラガ娘。ポニ子にもう『あの言葉』を言わねえでやってくれ。」

すまねえ、ワケはいつかちゃんと話すからさ……」

背を向けたまま、黒猫はそう呟いた。

## 第十二石：ナミダ、乾かして

その後、ゆりなの部屋で髪を乾かす俺たち。

小さなピンクのドライヤーを髪にあてつつ考えることといえば、やはりさっきの事だ。

「ありやあ……一体、なんだったんだ。おめえさん、なにか知ってるかい？」

再びに、俺の組んだあぐらの中へと陣取ったコロ美に訊いてみると、

「コロナもわからないんです。お姉ちゃまは『あの言葉』を言わないでほしいって言ってたのです」

あの言葉。

これはおそらく『ワガママ』というワードで間違いないだろう。

俺が『ワガママを言っな』と言ったから、ああなってしまった……と考えるのが妥当か。

だけでも、そんなただか言葉一つであれほどまでに辛そうに  
咳き込むか？

「コロナはトラウマの仕組みという番組をテレビで観たことあるの  
です。」

もしかしたら、その言葉がそれを

「刺激した、って？」

いやいや、まさか。まだ十にも満たない若さでそんなものあるは  
ずも無い。

フツのどこにでもいそうな子供に見えるゆりなに、『トラウマ』  
だなんてそんなもの。

「パパさん、本当にそう思ってるんですか？  
子供だから傷つかないと、何を言われてもヘーキだと、そう思っ  
てるのですか？」

ジッと見上げてくるコロナ。

む。

やけにつつかかってくるじゃねエか。

「……まどろっこしいねえ、何が言いてェんだ」

「コロナは、旧魔法少女さんよりチビチビなんです。

だけど、大人と一緒にちゃんと傷つくのです。パパさんに契約断られて怒鳴られたときとか、

パパさんにコロナと一緒にのお風呂はつまらないって言われたときとか…… ちゃっかりと傷ついてるんです」

げっ。

何食わぬ顔しているから平気なんだろうと思っていたのだが、マジでか。

「マジなんです」

ありや、まあ。

なんて返していいものやら、ドライヤーの風を冷風に切り替えながら、そう考えあぐねていると、

「でも、コロナは傷ついてもすぐに治るんです」

「そりゃあ、どういづってィ？」

という質問に一瞬だけ俯いたあと、

「それは　。」

パパさんが、その後すぐに優しくしてくれるから、なんです」

そう頬を染めて俺のパジャマをぎゅっと握った。

「あんだそりゃあ！　ははっ、わけわかんねーヤツう」

ぶつと吹き出した俺に、コロ美は珍しく怒った表情で、

「む。む。コロナは真面目なお話してるんです。

つまり、コロナが言いたいことは、傷ついても癒してくれる人が  
いればいいと思うんです」

「ふうん。そういうモンかねエ」

イマイチよくわかってませんといった俺の流し的なリアクション  
を不服そうに、

「あのですね。パパさんはさっき、  
旧魔法少女さんがフツーのおバカそうな子供だから傷つかないっ  
て言っていましたよね」

いや、おバカそうなどまでは言っただけでも。

「でも、逆に子供だからこそ傷つくようなことがトラウマたる原因  
だとしたら？  
そして、もしあの人が『いわゆるごく一般の普通の子供』じゃな  
いとしたら？」

「……さてはて。言ってる意味がよくわかんねえなあ」

「パパさんなら分かるハズ ううん、きっともうとくに気付い  
てるハズなんです。  
彼女の心の傷に、そして彼女と自分とのある共通点に」

へえ、これはこれは。

人の心の中に土足で踏み入ることのできる、スンバラシイ能力の  
持ち主だけある。



「いやはや。それは俺の心ん中を覗き見たから、だからそう断言できるってワケかい？」

少々おどけて言ってみるが、

「パパさんの言葉を借りると、コロナの能力をそこまで買いかぶって欲しくないんです。

少しだけ、パパさんだけの考えが読み取れるというだけでその奥底までは届かないのです」

「だったら、どうして俺の全てを知ったかのような、」

訊こうとしたが、俺はすぐさま口を噤んだ。

何故なら、コロナがあの手で、ニッと不気味に笑いながら俺を見上げたからだ。

「それは 。ピース様の選んだ『コドモ』だから、なんです」

「ど、どういふことじゃ。答えになってんのか、そりゃあ。もっと具体的に言ってくれよ」

「肯定。つまり、それはですね」

スツと息を吸って言葉をためるコロナ。

ごくりと喉が鳴る。

……ピースか。あの唯一にして最強の魔女だとかいうふざけた婆さんが選んだ子供。

俺は当然として、やはりゆりなも故意に選ばれた子供　　そういう事なのか？

いよいよキナ臭い話になってきたもんだ。

そう、神妙な顔をして待っていると、

「へっくち！……なんです」

ガクツ。

なんとも間抜けなクシャミに一気に脱力してしまう俺。

「あらら、鼻水出てんぞ」

「あ、う」

鼻水をズルズルとすすろうとしたそいつに、

「こら。ちゃんと鼻をかまないと中耳炎つつつ、こわい病気にな  
っちゃうんだぜ」

ティッシュを二、三枚取り出して鼻にあててやる。

「ほら、チーンて」

「ちーン」

「ん。キレイキレイになった……って、つまりそれはヘックチなんで  
すっつーのは、

どついう意味なんでえいコロ美イイ！」

うがーつとすごんだ俺に、コロナは鼻を真っ赤にして、

「ごめんなさいです。今のクシャミで何言っか忘れちゃったんです。  
えっと。パパさん、コロナの髪も乾かして欲しいのです。風邪ひ  
きそうなんです、いささかに」

「まったく、興醒めたアこのことだな。あと、さりげに俺の口癖マネしてくれるなよ」

「おっけー。恐縮なんです」

「……コロ美、おめえワザとか？」

「ぶいつ」

いや、どうしてそこでブイサインが出るんだよ。

ホント意味不明なガキンちよだ。もしかすると、今時の幼稚園児はみんなこんな感じなのか？

だとしたら全国の保母さんに同情しちまうぜ……。

そう頭の中で嘆いていると、またもやコロナが大きなクシャミをかました。

「あー、もう。しゃあねえなあ。俺様が乾かしてやんよ。チッ、めんどくせエめんどくせエ」

「やたっ」

「前向けー、前」

「肯定なんですー！」

と、前を向いたはいいが、ぴょんこぴょんこと跳ねるもんだからたまらない。

「はしゃぐなって」

ドライヤーをオンにしながら、

「ほら、ジツとしてなア。動くとヤケドすんぞ。つか、霊獣サマとやらも風邪をひくモンなのか？」

カラダ丈夫なんだよな、確か。

クロエ曰く、ちょっとやさつこのことじゃあケガしないとか言ってたよーな。

「肯定。ケガはしてもすぐウニョニョって治るんです。でも病気は普通にしちゃうのです」

「あーそう、ウニョニョっスか。お客さん不気味な体してるんスね」

「はい。不気味な体なんです」

そんな美容院のようなヘンテコな会話をしつつ、コロナの髪を乾

かしていると、

後ろのドアがカチャッと開いた。

「ん？」

振り向くと、まだ周囲に湯気を立ち昇らせているゆりながソーツと顔を覗かせていた。

「お、ゆりな。早いねエ、もうあがったのかい」

うんつ、と笑顔で返されるものばかり思っていたのだが、しばしの沈黙のあと、

「……あ」

と言って後ずさり、そして、

「うっつ」

と目に涙を浮かべてボタンと扉を閉めた。

どしたんだ？ と首を傾げている俺に、

「きっと、パパさんとどう顔をあわせていいのかわからなくて困ってるんです」

なるほど。別に、気にしちゃあいねーのに。

いや。あんなこと言ったんだし、気にしなければいけないのは俺のほう、だよな。

「パパさん。コロナのさっきのお話覚えてるですか？」

「ウニヨニヨってケガが治るんですって話？」

「否定。ウニヨニヨじゃないのです。傷ついても、癒してくれる人がいればつてくだりなんです」

「ああ、それ」

癒してくれる人って、言われてもねえ。

少なくとも、今日チビ助と会ったばかりの俺にそんな大役は務まらねーな。

だけど。まあ、なんだ。モヤモヤすんだよな。

癒す云々は正直ピンとこねエけど、あいつにはちゃんと謝らなきゃいけないな、っていうモヤモヤ感。

ま。ウダウダ考えていても埒があかねエし。

立ち上がり、ぐいーっと伸びをしながら、

「うしっ、あとは自分で乾かせるな？」

チビチビ助の頭をぽんぽんと叩いて、ドライヤーを渡す。

そしてドアの前に立ち、言ってみる。

「おーい、チビ助やーい。お前さんも早く髪乾かさないと風邪ひいちまうぞ」

いなかったりして。だとしたら恥ずかしいコトこの上ないが。

「しゃ、しゃっちゃん。えっと、その、ボクね。あのあの……」

お、いたいた。



ゆりなの声が聞こえやすいように、背中をドアにぴったりとくっ付けて、

「あー。ゆりなさ、さっきはゴメン、な」

「……………えっ？」

「なんつーか、イヤなこと言っちゃまって。悪気は無かったっていうか、ありゃ、コレいい訳か。」

その　とにかくゴメン。もう言わない」

「ううん。違うもん、しゃっちゃんが謝ることなんて全然ないよ。ボクの方こそ急におかしくなっちゃって、だからしゃっちゃんに謝らなきゃいけないって思ってた……………」

「じゃあ、おあいこ」

「でも、」

「めんどくせーから、おあいこ」

「う、うん。ありがと、しゃっちゃん」

ドア越しに泣き声が聞こえてくる。

ホント、泣き虫なヤツ……………。

「あのさア。髪、乾かしてやるよ。特別サービス、俺けっこう上手いんだぜ。」

さっき口アメで実験したし」

聞いた途端、頬を風船のように膨らませたコロナにごめんなポーズをとった後、

「だからまあ、もう泣くのはやめてさ。笑ってこっぜ。」

お前さんはそっちのほうが、じっくりくるつつか      まあ、なんていうか、」

言いかけたところで、急にドアがバツと開いた。

「しゃっちゃん！」

体を支えていたモンが無くなった俺は一瞬倒れそうになるが、すぐさま支えられた。

というよりも、抱きしめられたつつたほうがコレは正しいのか。

「……な、なんだよ、ジャーマンスープレックスでもかます気がイ？」

そんな俺の冗談に、

「にやはは。違うよーだ。チョークスリーパーだもんっ」

ポヘッと首を絞められた。

全然痛くは無かったのだが、そっちがその気ならと、

「いっひっひ。やったな、こんにゃろー。ジャイアントスイングす  
っぞー!」

「バリアするし!」

「甘い甘い、俺の世界じゃあ投げ技はバリア貫通なんだぜ!」

「えーっ、そんなのずるい。今はこっちの世界だもんっ」

「秘儀、チョーク抜け!」

ゆりなの腕からするりと抜け出し、

「さーて、覚悟しろってなモンで……」

そう振り返って、俺は目を見開いた。

あれ、コイツ。

「むー。こうなったら霊冥呼んじやおっかなあ」

よく見ると意外に　。

「しゃっちゃん？」

> i 3 1 1 2 6 — 1 7 6 1 <

「あ、ああ……。」

いや。ていうかお前、ずりいぞ。プロレスごっこで霊鳴呼んだら反則負けだつっつの」

「あ、そっか。反則負けになっちった。

にやはは！　やっぱ、しゃっちゃんと一緒にいると楽しいなあ」

屈託の無い笑顔を向けるゆりな。

俺は少し肩をすくめたあと、

「ん。やっぱりそっちの方がチビ助っぽい」

と、ついボソッと言ってしまった。

「え、しゃっちゃん何か言った？」

「なーんも。ほれ、それより髪乾かさねーの？」

「乾かすー！ わーい！ アイスウォーターちゃんわーい！」

バンザイして、何故かコロナを抱き上げるゆりな。

無表情のままブンブンとなすがままに振り回されるコロ美。

せっかく綺麗にセットしてやった髪がボッサボサになって……ト  
ホホとこめかみを押さえる俺、といった構図だ。

やれやれ、しかしまあ。

ああ言った方がいいが。

ちと、こいつの場合、元氣すぎるのも問題かもしれないな。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8741/>

---

魔法少女は俺がやるっ！

2011年9月14日22時18分発行